BLITZKRIEG

ブリッツクリーク 東部戦線 1941〜45

ヒストリカルノート

「ブリッツクリーク」

「バルバロッサ」への道

1940年夏、フランス戦の勝利によってナチス・ドイツは西ヨーロッパを支配し、ただ一国抵抗を続けるイギリスの降伏も時間の問題であるように見えた。

しかしドイツはイギリスを屈服させることができなかった。ドイツ軍には英本土上陸作戦を実行するための資材も技術もなく、空軍による航空攻撃もドイツ空軍の能力不足から失敗に終った。

このため、戦争はより長期化する気配をみせはじめていたが、英仏との戦争を考えず短期戦への準備しかなかったドイツの産業経済には資源不足等の問題が生じていた。

手詰りを解消し、戦争に勝利するためには新たな戦略が必要とされていたが、ヒトラーが考えたのはソビエトに対する戦争だった。

ヒトラーによれば、対ソ連戦によって得られるウクライナの穀物、カフカスの石油等の物資は長期戦を戦いぬくことを可能にし、ソ連の崩壊はイギリスの孤立を深め、イギリスに和平を求めさせるだろうとのことだった。この考えは将軍たちを納得させなかったかもしれないが、対ソ連戦への反対はなく、参謀本部は作戦計画の立案に取りかかった。1940年の残りの日々に作成されたのは次のような作戦だった。

ドイツ軍は北方、中央、南方の三個軍集団に編成され、主攻勢は北方、中央軍集団が担当する。国境近く、白ロシア地区で敵を包囲撃滅し、その後北方軍集団はレニングラード、中央軍集団はモスクワへと前進する。

この計画には、敵が国境で戦わず退却した場合の対応や、モスクワまでの長距離補給の困難等の問題点がいくつか存在したが、これらが考慮されることもなく、(ロシアは三週間で崩壊するとまで言われていた)作戦は認可され、1940年12月15日総統訓令21号「バルバロッサの場合」として発令された。

「バルバロッサ」に使用される150個師団(うち装甲19)は秋から冬にかけて続々と、ポーランドへ、ルーマニアへと移動していった。これはただちにソ連側の知るところとなったが、ドイツ軍に対する防衛が準備されることはなかった。

独裁者スターリンがこれらの情報を単なる政治的脅迫と判断したため、国境近くでの陣地構築等はドイツに対する挑発とされ禁止された。このためソ連軍は開戦をほぼ無防備で迎えることとなる。

一方ドイツ側にも新たな問題が起きていた。3月に英軍がギリシアに上陸し、ユーゴスラビアで反ドイツクーデターが発生したためである。バルカン半島への作戦の必要が生じたが、このための部隊は「バルバロッサ」用のものを使うしかなく、作戦開始は5月から6月へ延期されることとなった。

1941年 6月21日土曜日、国境には以下のような部隊が集結していた。

北方軍集団　（29個師団うち装甲3）
　第16軍
　第4装甲集団
　第18軍

中央軍集団　（50個師団うち装甲9）
　第9軍
　第3装甲集団
　第4軍
　第2装甲集団

南方軍集団　（41個師団うち装甲4）
　第6軍
　第1装甲集団
　第17軍
　第11軍

これに同盟国のルーマニア軍等を加えると、対ソ戦のために動員されたのは兵員300万、戦車3600台、航空機1800機の大兵力だった。

日付が変った深夜、各部隊は発進地点へと移動した。

2 開戦

6月22日日曜日午前3時15分、猛砲撃が開始され、国境は炎と轟音に包まれた。1時間後歩兵が国境を越え、戦車がそれに続いた。

開戦1日目は独軍の予定通りに全てが進行した。ソ連の国境警備隊は奇襲による混乱の中、各所で撃破されてゆき、そこに開いた穴を通って戦車隊が突進を始めた。ソ連軍の抵抗したわずかの場所を除けば、ドイツ軍はソ連領内を10㎞の単位で前進し、最も遠くまで進出した第8装甲師団は80㎞を一日で走破した。この時点では電撃戦が再現され

るのは確実なように見えた。
しかし、開戦二日目にはドイツ軍の自信をぐらつかせる出来事が起った。
ソ連軍が反撃を開始したのだった。この反撃自体は、各地でバラバラに実施されたため、ドイツ軍に損害を与えることなく撃退されたのだが、この反撃中での出来事がドイツ軍に精神的ショックを与えたのだった。
ショックを起こしたのは、T34、KVという二種類の戦車だった。
この戦車の装甲を破壊することは、ドイツ軍の戦車、対戦車砲では困難だった。88㎜砲と100㎜カノン砲はT34の装甲を撃破することができたが、これらの砲は装備の良い師団でも20門も持ってはいなかった。
このためドイツ軍がT34を相手にする時は、味方の練度の高さを利用して、キャタピラやエンジン部といった戦車の弱点を狙うしかなかった。ドイツ軍にはこの戦術を可能とするだけの質の高さもあったし、逆にT34は少数が練度の低い兵士と共に投入されたため、実際の損害はソ連軍のほうが大きかった。が、ドイツ軍は以後、自軍の兵器に不信を持ったまま戦わねばならなかった。
6月の終り、ビャリストクとミンスクで二つの包囲の輪が閉ざされた。中には50万のソ連軍がおりそのうち30万が捕虜となった。

◆88㎜砲

第2次大戦中にドイツ軍の使用した高射砲。砲身長は56口径。軽量の砲架のため、他国の同クラスの砲より機動性の高いのが特徴だった。
実戦参加は1936年のスペイン内乱からだが、この時すでに弾薬の90%が地上目標に対して使用された。
「バルバロッサ」作戦時、T34、KVの装甲を打ち抜ける数少ない砲のひとつだったため、戦線各所でドイツ軍の守護神となった。
この砲を車両搭載用に改造したものは、タイガーI型重戦車の主砲として使用され、タイガーの名を高めることとなった。
戦争後半には、さらに長砲身71口径の対空対戦車両用の88㎜破も開発され、こちらもタイガーII、ナースホルン、ヤークトパンサーなどの主砲として使用された。
また戦前に中国軍に少数が輸出され、捕獲した砲のコピーを、日本陸軍が制式高射砲として採用した。

3 スモレンスク会戦（ステージ1）

7月初旬、後方の包囲陣を歩兵師団と交代した第2、第3装甲集団は前進を再開した。目標はスモレンスク、ロシア以来の古都であり、この街がドウィナとドニエプルの二つの川とその間に形成されたドウィナ地峡にあるところから、モスクワ前面最後の防御に適した地域ともなっていた。このためドイツ・ソ連両軍はスモレンスクとその周辺で大激戦を交えることとなった。

6月末ソ連西方面軍は次の命令を出した。「ベレジナ川を死守しドイツ軍を阻止せよ」そして、士官候補生や敗残兵も含む予備部隊をベレジナと送り込んだ。ソ連軍はスモレンスクを守る場所としてその100km西を選んだのだった。

これに対してドイツ軍はすばやく対応した。7月1日には、第2装甲集団がボリソフ前面でベレジナに達し橋を占領、第18装甲師団が河の東へと進んだ。

ソ連軍はこれに対してボリソフ地区の兵力を全て投入し、戦車、オートバイ兵、高射砲から成るドイツ軍戦隊は橋を守りぬいたが、ソ連軍も執拗だった。ベレジナを失うことは、中央部の戦線全てを失うことになる。モスクワの安全を保つためにもベレジナを死守せねばならなかった。このため、ソ連軍は他の戦線が薄くなるのも構わずに大部隊をベレジナへとつぎこんだ。

7月3日、ボリソフの第18装甲師団の前にソ連軍の大戦車部隊が前進してきた。その数100台、それには多量のT34とKVが含まれていた。

ドイツ第18戦車連隊も出撃し200両規模の戦車戦が発生した。T26やBTは簡単に破壊されたが、T34とKVはIII号戦車を炎上させて進み続けた。が、ここでも最後に勝利を収めたのは良く訓練された兵の多いドイツ軍だった。III号戦車は数台で一つのペアを組みT34のキャタピラを狙いソ連戦車を各個撃破した。

ソ連軍は数日間攻撃をくりかえし、ドイツ軍、特に有効な対戦車兵器を持たぬ歩兵は大損害を受けた。

7月初頭の数日間、トロチノ・シエンノなどの村でこのような戦況が続いたが、ドイツ軍は最終的にソ連軍の抵抗を撃破して、前進を再開した。

7月10日、第2装甲集団はドニエプル河へ第3装甲集団はドウィナ川の戦まで到達していた。が、歩兵部隊は約100km後方に取り残されていた。この状況で装甲部隊のみが前進を続けるべきかどうか保守派の司令官と装甲部隊の指揮官の間で議論が起こった。現実にソ連軍はドニエプル川、ドイツ装甲部隊と歩兵との隙間の両方に兵力を集中しつつあり、ドイツ軍は歩兵を待つにせよ、装甲部隊のみが前進を続けるにせよリスクを負うことになった。

第2装甲集団司令官グデーリアンはさらなる前進を主張した。ここで歩兵を待つ間にドニエプル川が強化されるなら、装甲部隊の突破による短期間での電撃戦は不可能とな

り、「バルバロッサ」計画自体が崩壊する。この言葉に動かされて上級司令部も装甲部隊の前進を許可した。

7月11日グデリーアンの部隊は3ケ所でドニエプルを渡河した。装備の欠如したソ連軍が防御する都市を迂回し、戦車は村々に作られた橋頭堡を出発した。

北では第3装甲集団がヴィテプスクを経てスモレンスクの北方へと進出していた。

7月15日、第29機械化歩兵師団が南からスモレンスク市街へと突入した。ソ連軍は2個歩兵師団でスモレンスクを守備しており、機械化歩兵は家一軒一軒を白兵戦で奪わねばならなかった。7月16日の真夜中まで、スコップ、火炎放射器、手榴弾による戦いが続き、スモレンスク市街はドイツ軍の確保するところとなったが、これはまだスモレンスク戦の発端でしかなかった。

第3装甲集団は北からスモレンスクを迂回して、スモレンスク東方50kmまで進出、南からの第2装甲集団と手をつなぎ、スモレンスクを包囲することを計画していた。このため、麾下の各部隊は相互の連絡のないまま前進していたが、これに対してソ連軍が反撃をかけてきた。ソ連軍には新兵器ーカチューシャの愛称を持つーロケット砲も含まれ、ロケット砲の一斉砲撃の轟音は、ドイツ・ソ連両軍の兵士を等しくパニックに追いこんだ。

この結果ドイツ軍の前進はにぶり、包囲の輪は閉ざされなかった。が南からグデーリアンが来れば包囲は完成する。第3装甲集団は第2装甲集団を待ち続けた。

一方、第2装甲集団はスモレンスク占領に向かった第29機械化歩兵師団を除き東へ進んだ。進撃目標はイエリニャである。ジエスナ川の水源高地にあるこの町は道路の交差点であり、モスクワ攻撃の出発点として望ましい場所だった。

第2装甲集団の前進は、パルチザンを含むソ連軍の抵抗のためにはかどらず、第10装甲師団がほとんど燃料の切れた状態でイエリニャに到着したのは7月19日のことだった。

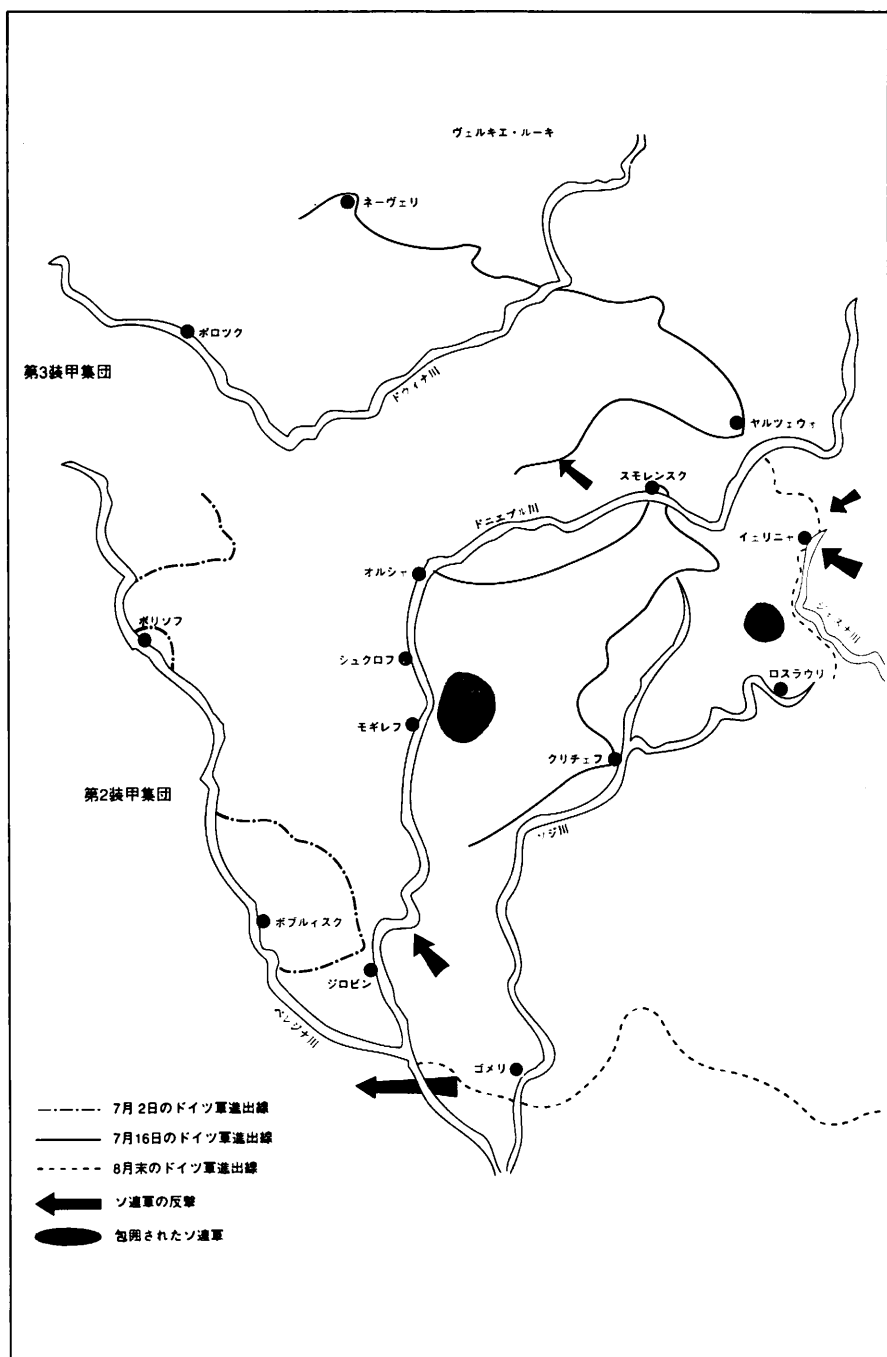
イエリニャにあったはるかに優勢なソ連軍に対する第10装甲師団の攻撃は市街戦となり、装甲師団は市街地を占領したもののそれ以上前進することはできず、第10装甲師団の戦力は急速に消耗し、22日には行動可能な戦車9両を持つだけとなっていた。

グデーリアンは、イエリニャに他の部隊を投入することを望んだが、全部隊が交戦中であり、イエリニャにさける部隊はなかった。これはまた、スモレンスク包囲を南から閉ざすことができないことを意味していた。

そして何より重要なのは、イエリニャやスモレンスクの市街戦によってドイツ軍の突進力が失われたことだった。

もともと機動兵器である戦車は市街戦は向いていない。しかし、歩兵がはるか後方にある現在、装甲部隊が歩兵の仕事をも行う他なかった。

このドイツ側の停滞を見のがすソ連軍ではなかった。ソ連軍は機甲部隊を含む大部隊を集結させ中央軍集団の前線各所で反撃を開始した。装甲と歩兵の間の隙間に、戦車、歩兵、騎兵までが投入された。これに対してドイツ軍が送ることのできる部隊は殆どなかった。装甲部隊は最前線で突出したまま逆包囲されかけていたし、歩兵もまた一歩一

ヴェルキエ・ルーキ
ネーヴェリ
ポロツク
第3装甲集団
ドヴィナ川
ヤルツェヴォ
スモレンスク
ドニエプル川
イェリニャ
オルシャ
ボリソフ
シュクロフ
ロスラウリ
モギレフ
クリチェフ
第2装甲集団
ソジ川
ボブルィスク
ジロビン
ベレジナ川
ゴメリ
7月 2日のドイツ軍進出線
7月16日のドイツ軍進出線
8月末のドイツ軍進出線
ソ連軍の反撃
包囲されたソ連軍

歩戦いながら進まねばならず、7月の間中、中央軍集団は困難な防衛戦を続けねばならなかった。

これは電撃戦の終末だった。ドイツ軍の快進撃はソ連軍を窮地に追い込んだもののソ連軍は崩壊せず、逆にドイツ軍が能力の限界を越えた行動を要求されていた。

もともとドイツ軍は短期間、短距離での戦闘しか考えておらず、補給、補充等の組織もまた短期戦の想定しかしていなかった。

このため補給部隊はその能力以上の行動を要求され、前線まで補給を届けることはおろか、悪路による車両の故障、ソ連軍の奇襲等により補給部隊自体が崩壊しかねない状況だった。

戦闘部隊もまた補給難からその戦力を極度に低下させていた。装甲部隊を例にとればソ連の道路事情の悪さや埃から、エンジン関係の部品は次々と損耗していたが、交換部品は届かず、開戦後一ヶ月の間に7割もの戦車が失なわれた。

このままモスクワへと前進するのは不可能だった。

参謀本部はこの戦況下で有効ではあるが、「バルバロッサ」本来の目的から外れた作戦を命じた。突出した第2装甲集団、第3装甲集団はそれぞれ南北に展開し、ドイツ軍に反撃を続けるソ連軍を撃滅することになった。

7月末、最初の歩兵部隊がようやく最前線に到着し、装甲部隊と交代した。

7月30日にまず第2装甲集団が南への攻撃を開始した。目標はスモレンスク南方ロスラウリ、この戦闘は再びドイツ軍によるソ連軍の包囲で終わった。ソ連軍の一部が脱出したとはいえ、4万の捕虜がドイツ軍の手に落ちた。

ロスラウリの戦闘の後、第2装甲集団はさらに南西へと向った。第2装甲集団右翼を除くためのこの作戦はロガチェフ、ゴメリへと続き、南からの脅威を排除することには成功したものの、結果として装甲部隊は前進点から100km近くも後退することとなった。

北方でも第3装甲集団が、同じような戦闘を続けていた。これらの戦闘により、7月に比べると中央軍集団側面への圧力は減っていたが、ソ連軍はまだ各地で攻撃を続けていた。

その場所の一つがイエリニャだった。イエリニャから装甲部隊が去った後には、歩兵3個師団を持つ第20軍団が配置されていた。第20軍団はここで一月近く戦い続けるが、それはまさしく地獄だった。ソ連軍は戦略上重要なイエリニャ奪回のためには弾薬も兵力も惜しまず、ドイツ軍は激しく消耗した。終日ソ連軍砲兵は猛攻撃を続け、歩兵はドイツ軍陣地に対して繰り返し突撃をかけた。これに対してドイツ軍には弾薬も不足しており、イエリニャを保持することは無理だった。

9月8日ソ連軍はイエリニャを奪回しドイツ軍の突出部を排除したが、これに対するドイツ軍の反撃はなかった。イエリニャ突出部を放棄することは戦線の整理となったし、イエリニャから出撃する装甲部隊も存在しなかった。情勢は一月の間に激しく変化して、いま装甲部隊は南、キエフへと向かっていた。

◆電撃戦(ブリッツクリーク)

第２次大戦初期のドイツ軍の行動を形容するために与えられた表現。(ドイツ語“Ｂｌｉｔｚｋｒｉｅｇ”)

戦略的には、地勢上ロシア・フランスの二大陸軍国に挟まれたドイツが両面戦争を回避するため考えられた、短期決戦思想が源流であるとされる。

作戦としては、敵主力との直接決戦ではなく、敵の弱点を衝き後方へ進入した敵を混乱させ、最終的に戦線を崩壊させるといった計画が考えられた。

具体的な戦術では、装甲師団が敵前線を狭い正面で突破し、抵抗の激しい拠点は迂回するか後続の歩兵に任せ、さらに前進を続ける。迂回が不可能な拠点に対してのみ攻撃を行うが、この場合は、速度をあげるため装甲師団から排除された重砲兵の代用としての急降下爆撃機をはじめ高火力を集中し、短時間で敵を撃破、前進停止は最低限にする。

このように電撃戦は何より速度を重視し、直接ではなく、間接的に敵の抵抗力を撃破する戦闘法だった。

実際に電撃戦の条件を満たすドイツ軍の作戦は1940年のフランス戦ぐらいのものだったが、装甲部隊の進撃や急降下爆撃等の強烈なイメージにより、ドイツ軍の攻撃全てが電撃戦と思われて、それは現在にまで継続している。

キエフ包囲戦（ステージ2）

キエフをめざす南方軍集団は開戦当初から他の２個軍集団と違い苦戦を続けていた。ソ連軍は大部隊をウクライナ西部に集結させていて、南方軍集団は劣勢な兵力で（例えば戦車はドイツ800両に対してソ連4500両）攻撃を行わねばならなかった。　南部戦区でも他の場所同様６月23日には反撃が命令されていた。最初の反撃は簡単に撃退されたが、南西方面軍にはまだ大量の機械化部隊があった。

６月26日ソ連軍は４個機械化軍団をもって反撃を再開した。先頭に立つのは数百両のT34とＫＶ、目的はドイツ第１装甲集団の撃滅。

戦闘は数10kmの間で四日間続いた。が、この反撃も失敗した。

たしかに大量のT34とＫＶを持った機械化軍団は第１装甲集団にかなりの損害を与えはしたが、各機械化軍団が何の連携もなく行動したため、反撃にでた装甲師団によって各個撃破されてしまったのだった。

４日間の戦車戦を戦い抜いた第１装甲集団はソ連軍の混乱を利用して突破をはかった。この攻撃はかなりの成功をおさめたが、要塞化された旧ポーランド＝ソ連国境線で前進は阻止された。

７月７日になって第１装甲集団は要塞線を突破することができたが、ソ連軍が後続する歩兵部隊との間に侵入したため防衛に移らねばならなかった。

それでも南方軍集団は７月いっぱいかかって前進を続け、ウマーニで８月の初旬、包囲網を形成することができた。この後の一連の戦闘で南方軍集団はドニエプル西岸を制圧することができたものの、ソ連軍はキエフを頂点とするドニエプル川沿いの戦線を維持していた。

このドニエプル突出部は北で中央軍集団の側面に向かっており、７月の間ここから行われた攻撃は、中央軍集団の前進を止める一因ともなっていた。

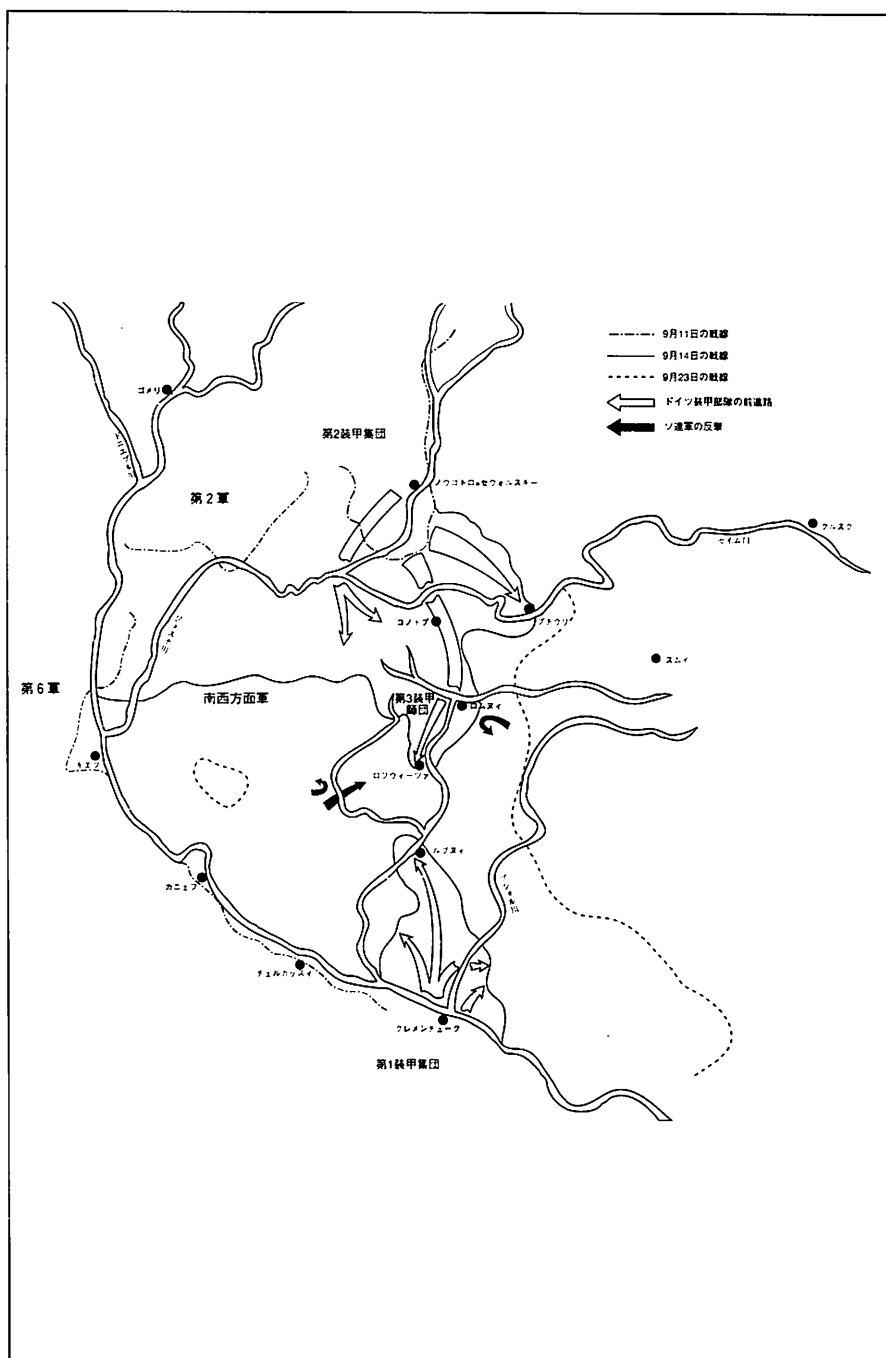
ヒトラーはモスクワ攻勢を再開するためにも側面の脅威を取り除く必要があると考えた。都合の良いことに第２装甲集団がロスラウリ、ゴメリ線のため南西に移動したため、キエフ包囲への参加が可能となっていた。

８月21日、新たな総統命令が下った。「キエフ突出部の敵を撃滅せよ」

この命令に多くの指揮官は反対したが、ヒトラーの決心は変らなかった。

８月25日、第２装甲集団が北からの攻撃を開始した。先頭にたつのは第３装甲師団。

作戦当初の数日間はソ連側が攻撃はモスクワに向かうものだと誤認したこともあって、前進する部隊よりも側面援護の部隊が苦戦を続けたが、第２装甲集団がキエフ遥か後方ジェスナ川に橋頭堡を作るころには、ソ連軍は全地点で激しく抵抗するようになっていた。特にジェスナ川橋頭堡周辺の防御は固く、ドイツ軍はジェスナ川から先へと進むことができなかった。

9月11日の戦線
9月14日の戦線
9月23日の戦線
ドイツ装甲部隊の前進路
ソ連軍の反撃
ゴメリ
第2装甲集団
第2軍
ノウゴロド・セウェルスキー
クルスク
セイム川
コノトプ
ブチウリ
スムイ
第6軍
南西方面軍
第3装甲
師団
ロムヌイ
キエフ
ロフウィーツァ
ルブヌイ
カニェフ
チェルカッスイ
クレメンチューク
第1装甲集団

グデーリアンの部隊が自分の後へと回りこんだことを知ったソ連南西方面軍司令官は、キエフからの撤退許可を要請したが、返ってきたのは、キエフ死守の命令だった。

9月4日、第2装甲集団はジェスナ川を突破すると再び南へと前進した。ソ連軍は防衛のため部隊を続々と送りこんだが、ドイツ軍の足を止めることはできず、ドイツ軍の進出を遅らせたのは雨で泥沼となった道だけだった。

9月10日、南方クレメンチュークから第1装甲集団も発進した。こちらの先頭をつとめるのは第16装甲師団で、悪路をついて一日に数10kmを前進した。

キエフにあった南西方面軍は、自分たちの後方で罠が閉じようとしていることを知ってはいたが、死守命令に従う限り部隊を罠の外へと退却させることはできなかった。退却が許可されたのは9月17日、南北のドイツ軍が手をつないで三日目のことだった。
もはや手遅れだったが、ソ連軍は包囲網を破るため、包囲の内と外から攻撃を続けた。この必死の戦いは一週間続いたが、包囲網を破ることはできず、南西方面軍司令官を含む多量の戦死者が残されただけだった。

9月26日、戦闘は終わった。ドイツ軍の戦果は66万の捕虜と4000門近い砲などであり、南方のソ連軍は一時的な麻痺状態におちいった。

この勝利を誰よりも喜んだのは当然ながらヒトラーだった。ヒトラーはキエフの勝利によってソ連軍の抵抗力はなくなったと判断し、新たな作戦を命じた。

「目標はモスクワ。」

5 「タイフーン作戦」(ステージ3)

9月26日に発令された「タイフーン作戦」はその開始日までには殆ど時間がなく、一部では部隊の再編成に多少の混乱も生じたが、中央軍集団は攻勢用に装甲14個師団を含む70個師団を結集させることができた。兵員に15%、戦車には25%の損失があったとは云え、この戦力を見る限り作戦の成功は確実なようにみえたが、冬までの時間の少なさはこの作戦当初から、ドイツ軍を離れることのない不安の原因ともなっていた。

9月30日、第2装甲集団がまず攻撃を開始した。最初のうちにこそ前進ははかどらなかったが、ドイツ軍はやがてソ連軍の抵抗を撃破し、一日に50km以上の距離を進撃するようになっていた。

10月3日、第4装甲師団が戦線後方200kmにあるオリョールを占領した。これに続く装甲師団群もまた交通の中心ブリャンスクの背後に進出、ブリャンスク方面軍を包囲した。

10月2日に始まった第3、第4装甲集団による攻撃も順調に進み、ウィヤジマ包囲陣を形成した。この巨大な包囲網の中に閉じこめられたソ連軍は80個師団に及ぶ兵力だった。

しかし、ドイツ軍がこの大戦果をさらに拡大することはできなかった。

最初にドイツ軍の足を止めたのは小規模の部隊だった。オリョール占領後、ツーラへと進撃を続ける第4装甲師団に対して投入された、T34で編成された第4戦車旅団はその代表的な例だと言えるだろう。

10月6日、ムツェンスクの道路を進む第4装甲師団第35戦車連隊に、第4戦車旅団が襲いかかった。道路上を進む先頭と最後尾の戦車が破壊されたため、ドイツ軍の行動の自由が失われ、後は虐殺も同然に30両以上の戦車が破壊された。残骸の上に初雪が降った。

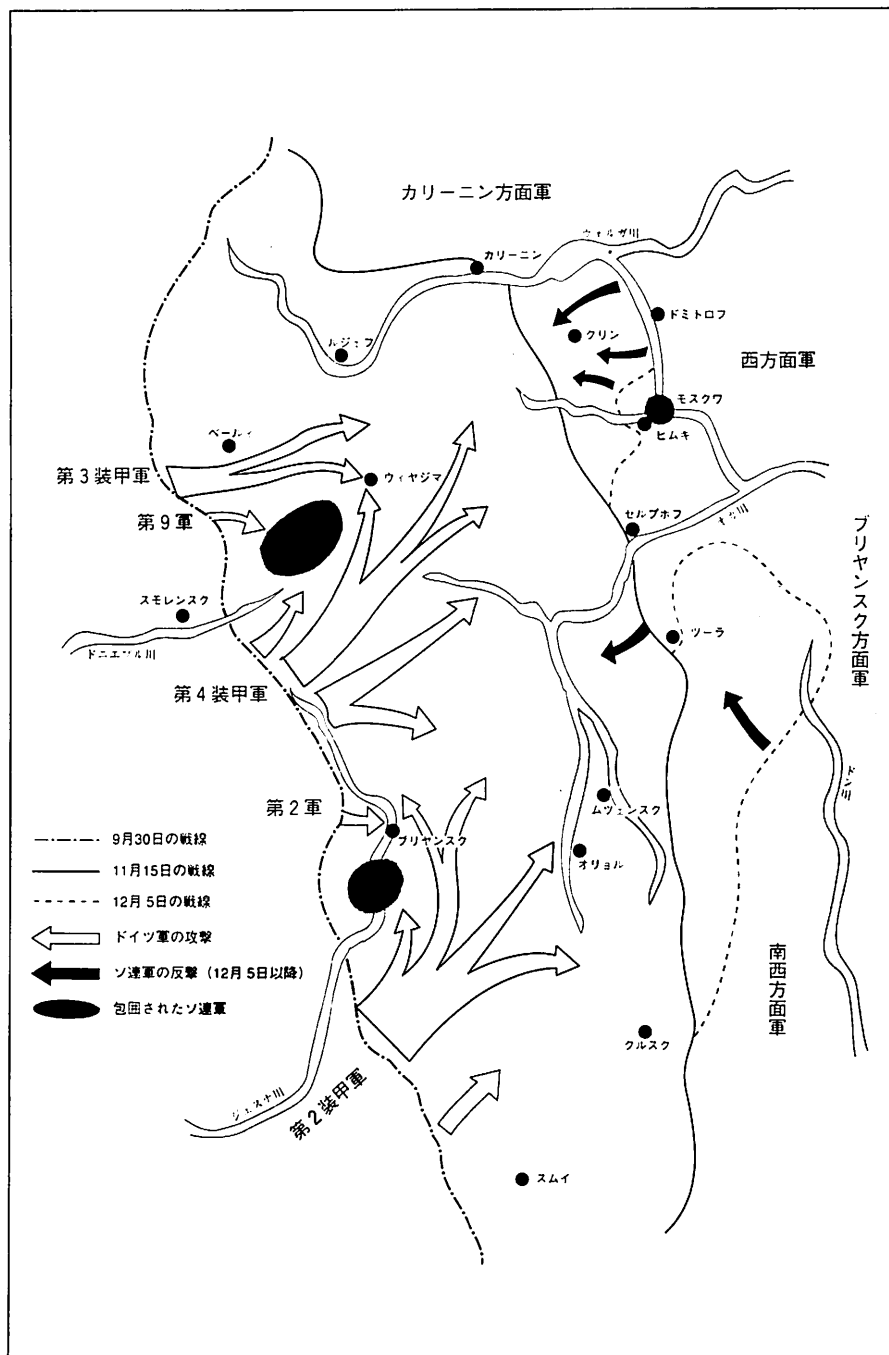
この戦闘の損害の大きさから第4装甲師団は再編成のため2日間停止せねばならなかった。

第4装甲師団が前進を再開するころ雪が溶け、道路は底無しの泥沼に変った。

全ての車両が泥に動きを止め、戦車も例外ではなかった。ドイツ軍は車両を泥沼から引きずりだしながら、泳ぐようにして動きだしたが先頭に立つのは歩兵の仕事となっていた。

一方、ソ連軍側ではこの泥の間にウィヤジマで失われた部隊に代る兵力を各地からかき集めていた。指揮を取るのはジューコフ将軍、開戦以来危機のある場所を飛び回っていた男がモスクワの守護者に選ばれたのだった。

10月13日、ドイツ軍は、泥の中をモスクワ第1次防衛線へと迫っていた。戦車が動けない今、トーチカや地雷源に立ち向かうのは突撃工兵たちだった。彼らは火炎放射器や爆薬を駆使して、ソ連軍の拠点を一つ一つ破壊していった。損害は大きかったが第1次防衛線は破れ、ドイツ軍は泥に埋りながらさらに前進を続けた。

カリーニン方面軍
ウォルガ川
カリーニン
ドミトロフ
クリン
ルジェフ
西方面軍
モスクワ
ヒムキ
ベールィ
第3装甲軍
ウィヤジマ
第9軍
セルプホフ
ブリヤンスク方面軍
スモレンスク
ツーラ
ドニエプル川
第4装甲軍
ドン川
ムツェンスク
第2軍
ブリヤンスク
オリョル
9月30日の戦線
11月15日の戦線
12月 5日の戦線
ドイツ軍の攻撃
ソ連軍の反撃（12月 5日以降）
包囲されたソ連軍
南西方面軍
クルスク
第2装甲軍
スムイ

南方でも第2装甲軍がツーラへと進むべく苦闘していた。軍に昇格はしたものの、補給部隊は遥かな彼方で泥に埋れており、砲弾もパンも届かなかった。

それでも、第24装甲軍団の戦隊はツーラの前面にまで進んだが、ツーラを陥とすことはできなかった。ソ連軍はツーラの家々を陣地化しており、攻撃は多大の損害を受けて撃退された。

いまドイツ軍は寒気を待ち望んでいた。道が凍りつけば装甲部隊が動き出し、夏のスピードを取り戻せると兵達は考えていた。

11月7日寒気が到来し、気温は零下に低下した。補給品もわずかながら届くようになり、ドイツ軍は息を吹き返しはじめた。

11月13日、各軍集団司令官及び参謀長がオルシアに会議のため招集された。議題は冬の間の作戦方針。南北両軍集団は防御に移ることを望んだが、中央軍集団は攻撃を選んだ。中央軍集団の状況も良くはないが、モスクワ占領は可能との考えからの結論だった。

数日間は攻撃は順調に進行したが、11月20日過ぎ、気温は零下30度にまで低下した。冬将軍が登場し戦場を支配した。

夏服を着たドイツ兵達は次々と凍傷に倒れ、戦車のエンジンまでが凍りつく寒気の中で、ドイツ軍の攻撃力は急速に衰えていった。

最初に攻撃をあきらめたのは、グデーリアンだった。彼の第2装甲軍は、ツーラ占領に失敗した後、ツーラを包囲したままさらに前進を続けていたが、寒気と燃料不足で部隊は停止した。そこへソ連軍戦車隊が繰り返し攻撃をかけてきた。第2装甲軍が逆包囲され撃滅される危険を感じたグデーリアンは、軍を防御へと移行させた。

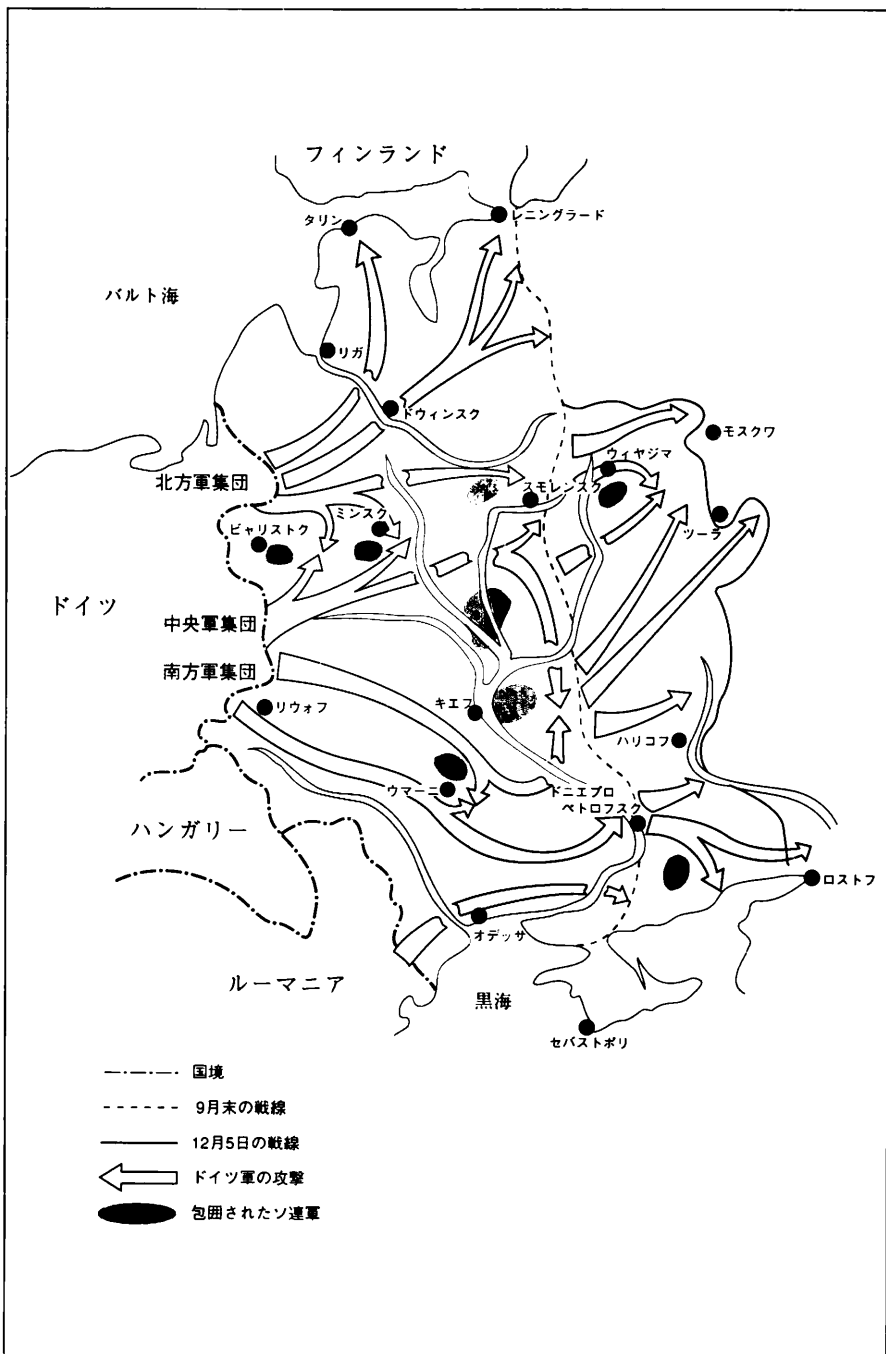
が、モスクワ前面ではまだドイツ軍は攻撃を続けていた。戦いはモスクワ攻略のためと云うよりは生存のため、一零下30度の夜を屋外で過すことは死を意味した一家々を得るためへと変りつつあった。

11月30日、ソ連軍戦線の隙間に浸透した工兵はモスクワ郊外8㎞にある村ヒムキに達した。ここはドイツ軍がモスクワにもっとも接近した場所となったが、その夜、戦車工場から直送された戦車と労働者から成る一隊によってヒムキは奪回された。12月5日には全戦線で攻勢が中止された。

ソ連軍司令官ジューコフはこの時を待っていた。ドイツ軍の攻勢が中止されると同時にソ連軍が反撃に転じた。

最初に反撃を受けたのはモスクワの北、クリン地区にあった第3装甲軍だった。ソ連軍の突破は成功し、12月7日には先頭部隊がクリン北部に到達した。これに対して第1装甲師団が投入され、ソ連軍は撃退された。以後1週間にわたり第1装甲師団はクリンを通る退却を援護するためにソ連軍の攻撃をくい止め、その後12月15日にクリンを放棄した。

続いて反撃されたのはツーラの第2装甲軍だった。すでに防御にはいっていたため、戦線を突破されることはなかったが、攻撃の激しさに戦線は100㎞以上も後退させられ

フィンランド
タリン
レニングラード
バルト海
リガ
ドウィンスク
モスクワ
ウィヤジマ
北方軍集団
スモレンスク
ミンスク
ビャリストク
ツーラ
ドイツ
中央軍集団
南方軍集団
リウォフ
キエフ
ハリコフ
ウマーニ
ドニエプロ
ペトロフスク
ハンガリー
ロストフ
オデッサ
ルーマニア
黒海
セバストポリ
国境
9月末の戦線
12月5日の戦線
ドイツ軍の攻撃
包囲されたソ連軍

ることとなった。

反撃は10日の間続いたが、凍傷患者が兵員の四割をしめ、零下50度の寒気に作動不良を起こした兵器しか持たないドイツ軍には、ソ連軍の前進をくい止める手段はなく、ドイツ軍はモスクワ前面から退却するしかなかった。

この敗北に誰よりも敏感だったのはヒトラーだった。ヒトラーは退却を命じた司令官を解任、部隊には現在地の死守を命令した。

一方の独裁者スターリンは、この反撃の戦果を過大評価して、さらに大規模な攻撃を討画した。ジューコフは兵力不足を理由にこれに反対し、第２次反撃も中央軍集団に対するものに限るべきだと主張したが、スターリンはこれを聞入れず、レニグラードから黒海までの全戦線での攻撃が実施されることとなった。

１月10日、ソ連軍の攻勢が始まった。モスクワ地区での赤軍の作戦は、中央軍集団を包囲撃滅するというものだったが、兵力不足から数日の内に攻撃は停滞し、それがモスクワの戦いの終末ともなった。

この冬期戦によるドイツ軍の損失は70万を超え、補充されたのはその半分35万でしかなかった。この損失は以後埋められることはなく、ドイツ軍がモスクワへ向うことも二度となかった。

◆ジューコフ

ソ連元帥。帝制ロシア陸軍の騎兵軍曹。ノモンハン事件で日本軍をやぶったことからスターリンの目にとまり、開戦時には参謀総長の要職にあった。

41年の夏の間、キエフ、レニングラード等、危険な地点にスターリンの代理として派遣された。

西方面軍司令官として「タイフーン」作戦に対抗し、民兵を含む部隊を時として全滅するまで戦わせ、「タイフーン」を阻止する。その後の反撃の功により元帥に昇進。

スターリングラード、クルスク等でもスターリンの代理として指揮を取り、第１白ロシア方面軍司令官としてベルリンを攻略した。

敵の攻撃を防御により消耗させ、その後反撃に出るといった作戦を得意とし、純粋な攻撃作戦については戦争後半でも失敗が多かった。

6 「青」作戦（ステージ4）

1942年２月の末には激戦が続いていたものの、ドイツ軍がこの冬の戦いを耐え抜けることは明らかとなっていた。

この戦況に安心感を持ったヒトラーは、来るべき夏のための作戦計画立案を命じた。

将軍たちは冬期戦での損失を考え、攻勢には反対の者も多かったが、ヒトラーの攻撃の意志は強かった。

またこの夏攻撃に出ることがまちがっているわけでもなかった。1941年12月のアメリカの参戦が連合国の戦力を格段に増加させることを考えれば、ソ連を戦線から脱落させることは、勝利を得るために残された最後のチャンスだともいえた。

３月いっぱいをかけて夏期攻勢のためのさまざまな計画が検討され、その中から選ばれたのはカフカスの油田の占領をめざすものだった。カフカス作戦は３月28日ヒトラーに了承され、４月４日には以下のような計画が完成され、ヒトラーに提出された。

第１段階ではオリョール地区からとアゾフ沿岸から攻撃、二つの部隊はスターリングラード西部で合流、ドンとドネツの間の敵を包囲する。

第２段階で主力は南へと展開、カフカス油田を占領する。

この計画は基本的にヒトラーの承認するところとなったが、参謀本部案ではなく、ヒトラー自身が作戦の細部までを規定した計画を実施することを命じて、このヒトラーによる改定案が、総統命令第45号「青」作戦として４月15日に発令された。

この発令以後、ドイツ軍は攻勢準備にはいったが、「バルバロッサ」及び冬期戦での兵員、装備の消耗は激しく、攻勢に必要な兵力の集結にはかなりの困難がともなっていた。

装甲師団を例にとれば、1941年の戦闘による戦車の喪失はドイツの戦車補充力を越えるものだった。この状況で攻撃に必要な戦車を確保するためにとられたのは、平穏な方面の戦車連隊から大隊単位で部隊を引きぬき、攻撃用の戦車連隊の戦力を定数にまで回復させるといった手段だった。

このように東部戦線の他の部分を犠牲にしてまで兵力は集められたが、それでもまだ兵力は不足していた。

そこでドイツ軍が全力で攻勢を続けることが可能なように、作戦の進行によって長く延びるドン河に沿った側面を守備する任務は、ルーマニア、イタリア等の同盟国軍に任されることになった。同盟軍の戦力の低さを考えれば、側面を大きな危険にさらすことを意味する決定だが、ドン河が天然の防御線となることから危険の度合いは減るものと考えられていた。

これらの部隊は春の間を通じて攻勢開始地点へ集合し、まず「青」作戦の足場をととのえるために５月にハリコフ南方で戦闘が開始された。

ここではソ連軍がハリコフに向う攻撃を実施していたが、第１装甲軍の攻撃はソ連軍

の主力を包囲することとなった。

6月にはクリミア半島での戦いが続き、これらの戦闘でソ連軍が大量の兵力を失ったことが、「青」作戦での兵力バランスをドイツ側に有利なものとすることになった。

6月28日、クルスク地区の第4装甲軍が行動を開始した。先頭をゆく第24装甲師団は敵中深く侵入、敵後方に混乱を起こしながら二日間で、作戦目標ヴォロネジへの道のなかばを走破した。

この脅威に対してソ連軍は機甲軍団を投入して対応し、6月30日、両軍の戦車部隊が衝突した。

ここでも勝利者はドイツ軍だった。ドイツ軍兵士の戦術能力はソ連側を上回っていたし、IV号戦車G型やマルダーなどのT34を破壊できる車両の増加も、ドイツ軍に有利な条件となっていた。

またこの日、南方から第6軍がヴォロネジに向け動き出した。こちらの進撃ペースも速く、第4装甲軍との合流でソ連軍を包囲するのも数日のうちに可能になりそうだった。が、ソ連軍も自軍の危機的な状況は充分に理解しており、劣勢な者のとりうる数少ない戦法、退却を命令した。

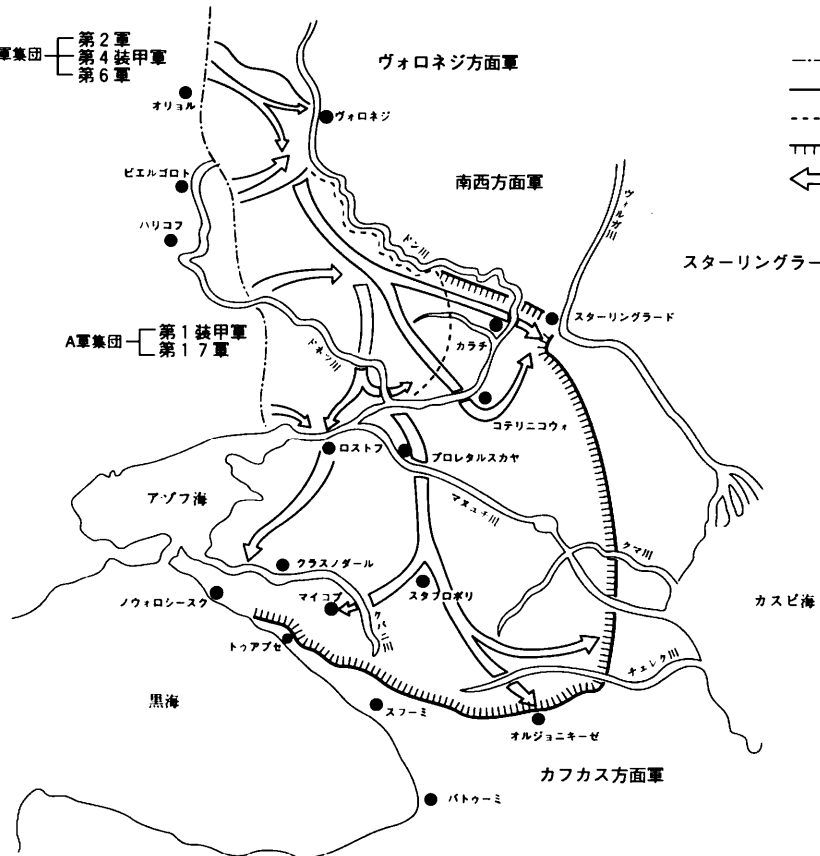
ソ連軍の退却はドイツ軍のすぐに知ることになった。ソ連軍を捕捉できなければ、「青」作戦の第1段階は完全な失敗に終ることとなる。ドイツ軍は前進を急いだが、ドン河の西でソビエト軍を捕まえることはできなかった。

このため、「青作戦」を成功させるために部隊を南へと旋回させ、まだドンの西にあるソ連軍を捕捉する必要が生じた。だが、第4装甲軍の部隊はヴォロネジへと向っていた。南方軍集団は第4装甲軍に南方への方向転換を命じたが、ヴォロネジの防御は薄いとの前線からの連絡に命令を変更、鉄道、道路の重要な交点でもあるヴォロネジ占領の指令を出した。

確かに、第24装甲師団は敗走するソ連軍を追い、ヴォロネジ郊外にまで達していた。しかしソ連側はヴォロネジを渡すつもりなどなく、ヴォロネジとその周辺に4個軍もの部隊を集結させつつあった。結果としてヴォロネジへの作戦は、第4装甲軍の殆どの装甲部隊を市街地の攻撃につぎこむという最悪のパターンとなり、戦車が釘付けになっている間に、南方のソ連軍にドンの対岸への退却を許すこととなった。これを知ったヒトラーは激怒し、第4装甲軍にただちに南下を命じたが、戦闘中の部隊はなかなか戦場を離脱できず、離脱した部隊も燃料が切れたため南へは進めなかった。

もう「青」作戦の第1段階が失敗に終りつつあることはあきらかだった。が、明るい面もないわけではなかった。ソ連軍の退却は士官の能力不足からソ連軍に大混乱をまき起こし、退却は潰走へと変わろうとしていた。

ヒトラーはソ連軍の混乱を崩壊の印だと信じた。その判断からヒトラーは「青」作戦第1段階の成功を待たなくとも作戦目標は達成可能だと考え、カフカス、スターリングラード二方面の同時攻撃を命じた。

B軍集団
第2軍
第4装甲軍
第6軍
ヴォロネジ方面軍
6月29日の戦線
7月11日の戦線
7月22日の戦線
11月18日の戦線
ドイツ軍の攻撃
オリョル
ヴォロネジ
ビエルゴロト
南西方面軍
ハリコフ
ドン川
ヴォルガ川
スターリングラード方面軍
スターリングラード
A軍集団
第1装甲軍
第17軍
ドネツ川
カラチ
コテリニコウォ
ロストフ
プロレタルスカヤ
アゾフ海
マヌィチ川
クマ川
クラスノダール
スタブロポリ
ノウォロシースク
マイコプ
クバニ川
カスピ海
トゥアプセ
テェレク川
黒海
スフーミ
オルジョニキーゼ
カフカス方面軍
バトゥーミ

ヒトラーの命令を実行するため、部隊の再編成がおこなわれた。南方軍集団はA・Bの2個軍集団に変り、A軍集団はカフカスを、B軍集団がスターリングラードを作戦地域とすることとなったが、ヒトラーはカフカスの占領を重視し、A軍集団に第1、第4の2個装甲軍を配属した。

ドイツ軍は7月中旬、新たな行動を開始したが、事態はヒトラーの望み通りにはすすまなかった。原因は、敵よりは味方の問題によるものだった。ドイツ軍にはスターリングラード、カフカスの両方面に同時に使用できる補給部隊はなく、B軍集団は補給切れで前進を止めた。またA軍集団も第1、第4装甲軍という強力な攻撃部隊を与えられたものの、この2個軍が同一地域へと送り込まれたことで起こった交通渋滞により、装甲部隊の前進速度は低下した。このためドン河の西にあったソ連軍は南へ退却をつづけることができ、装甲師団がドンについたときソ連軍は河向うに姿を消していた。

7月22日、第1装甲軍と第17軍が、ドン河南岸の戦線の要点ロストフに迫った。ロストフはソ連軍によって要塞化されていたが、この街と近郊にある大鉄橋はカフカス進撃には欠かせぬものであり、数日間に渡る市街戦の末ドイツ軍はロストフを占領し、ドンの南岸に渡った。

7月25日、ヒトラーからの新たな命令が下ったが、この作戦はヒトラーの抱いたソ連軍崩壊幻想を基礎としたものであり、カフカス山脈北の油田を占領するとの目標は、山脈を越えた黒海沿岸、トルコ国境近くまで広げられ、これはカフカス全土の制圧を命じられたのも同じ事だった。

そのうえヒトラーは第4装甲軍にスターリングラードへの転進を、予備部隊にはレニングラードへの移動も命令しており、この結果A軍集団は減少した戦力によって拡大された目標を攻略せねばならないこととなった。

7月末A軍集団はカフカスに向けて前進を開始した。その前に広がるのは川によって縦横に区切られた500kmの草原、そして4000m級の峰の並ぶカフカス山脈。これら防御向きの地形を踏破することの困難さは作戦前にすでに明白だったが、命令は実行されねばならなかった。

それでも数日の間の展開は順調だった。8月1日には第3装甲師団がアジアとヨーロッパの境界マヌユチ川を渡り、アジアへと入り、歩兵も40度に達する猛暑の中を一日に10km単位で歩き続け装甲部隊に続いた。

8月9日、第1装甲軍は油田地帯の都市のマイコプを占領したが、油田は退却するソ連軍によって破壊されていた。

マイコプ占領後、第1装甲軍はバクーを目指して進撃を開始したが、数日のうちに山岳地帯での前進は燃料不足のために停止し、A軍集団全てがカフカス山脈の前にその動きをとめた。

ヒトラーはこの停滞を許すことができず、A軍集団の指揮を（戦線はるか後方から）取ることとした。が、状況は変らなかった。カフカスの峠を越え黒海の港を占領するた

めの第17軍の攻撃は山脈を南に越えることはできなかったし、第1装甲軍もバクーのはるか前方チエレク川を渡ったところで阻止され、11月中旬の豪雨は作戦行動を不可能とした。

このときにA軍集団の前線は1000kmに達していて、これを消耗した部隊が保持することは困難だったが、ヒトラーは退却を認めなかった。

結局、1943年1月初めにA軍集団にカフカスからの撤退が許可されたが、この後退戦で兵力はさらに消耗し、多くの重装備が泥の中に放棄された。ドイツ軍兵士は、カフカス作戦を自嘲をこめてこう呼んだ。「コーカサスいったりきたり」

◆T34

第2次大戦を代表する名戦車。ソ連でそれまでに生産されたBT（快速戦車）シリーズの経験を生かして、高威力の砲を持ち生産性にすぐれた戦車として設計、製作された。

76mm砲と最大45mmの傾斜装甲を備え、最高速度53kmの性能は、登場当時の1940年には、比較の対象を持たぬ高性能であり、終戦時の1945年にも充分に第1級のものといえた。

二人用砲塔のため砲の発射速度が遅い、無線器が指揮官車以外には装備されていない等の欠点もあったが、二人用砲塔以外の欠点は戦争中の改良によって克服された。

1943年には新型のドイツ戦車に対抗するため、三人用の大型砲塔に85mm砲を装備したT34／85が登場した。

またT34の車体を利用して、SU85、SU100、SU122と三種の突撃砲が製造され、T34を支援した。

T34の優秀さを証明する例としては、T34／85が登場後50年近く経過した現在も使用されていることをあげるだけで充分だろう。

T34　1940年型主要要目

全長：5.92m　全幅：3m　全高：2.4m　重量：26.3t
乗員：4名　エンジン：500馬力　最高速度：53km　行動距離：465km
武装：76mm砲×1、機銃×2　装甲：45mm

T34/85主要要目

全長：6.1m　全幅：3m　全高：2.72m　重量：32t
乗員：5名　エンジン：500馬力　最高速度：53km　行動距離：350km
武装：85mm碗×1、機銃×2　装甲：45mm

スターリングラード（ステージ5）

総統命令によりスターリングラード攻略は第６軍の任務とされていたが、燃料不足で停止していた第６軍が前進を再開したのは７月23日のことだった。この間にソ連軍は大工業都市であり、ヴォルガ川による輸送の枢要スターリングラードを守るため、両翼をドン川によって援護されたドンの西岸に防衛線を築いていた。

23日に始まったドイツ軍の計画は南北から伸ばした「腕」でソ連軍を包囲するものだった。北からの攻撃を担当したのは、第16装甲師団を中心とする第14装甲軍団だった。

第16装甲師団の前面の陣地は強固に守備されており、突破口が開くまでには三日間が必要だったが、突破口が開くと同時に第16装甲師団の各戦隊が合流点カラチへと向って突進し、ドン川へと迫った。

この危険に対してソ連軍は第１、第４機甲軍を第16装甲師団に対して投入した。戦車数、兵力等はソ連側に有利だったが、第１、第４機甲軍がほとんど未訓練だったことでその利点も打ち消されていた。

第16装甲師団と第１、第４機甲軍の戦闘は数日間続いた。第16装甲師団は友軍から孤立し、燃料は空中補給に頼るしか無かったが、各戦隊は、ハリネズミの陣をしきソ連戦車を撃退した。ソ連第１、第４機甲軍はこの戦いで実質的に全滅した。

８月８日、第16装甲師団と南からの第24装甲師団がカラチで手を握り、ソ連軍８個師団と７個戦車旅団が包囲された。８月16日にはドン川を渡る鉄橋も工兵により奪取され、ドイツ軍はドン川を東に渡り、包囲されたソ軍兵は次々と狩りたてられていった。

８月19日に第６軍司令部は以下のスターリングラード攻撃計画を立案した。ここでも第16装甲師団が先鋒をつとめ、スターリングラードまで直進し、その後南へ変針しカフカスから引返した第４装甲軍と合流、包囲された敵は歩兵が掃討する。全戦線での攻撃は補給状況が許さなかったため、この計画が選ばれたのだか、カラチ戦で弱体化したソ連軍の対応力は低下しているとの判断もあり、この計画の成功は確実だと第６軍は考えていた。

８月23日午前４時30分、第16装甲師団が行動を開始した。第２戦車連隊を中心とする戦隊が先頭に立ち敵中を突進する。道路わきの標識がスターリングラードへの道と距離を教えてくれる。50km、45、30、10。足の遅い部隊は遅れたが、第２戦車連隊第１大隊は夕方までに55kmを走破し、スターリングードド北の郊外スパルタコフカ村に達した。村のソ連軍は戦車に砲撃をあびせ、ドイツ軍も応射した。戦う彼等は知る筈もなかったが、これがスターリングラード戦の始まりだった。

ソ連軍はスパルタコフカでの交戦に素速く反応し、手近にあった歩兵、民兵などの各種部隊をスパルタコフカに送り込むと共に、突出してきた敵の後方への攻撃も命令された。このため８月24日朝の第16装甲師団のスパルタコフカ攻撃は、激しい砲火によって

撃退され、逆にドイツ軍はトラクター工場から直接戦場に向ったT34を含む部隊の反撃にさらされた。ドイツ側は後続の歩兵の前進を急がせたが、ソ連軍が新たに投入した部隊によって阻止され、第16装甲師団は孤立したまま、一週間近くを戦い続けねばならなかった。

ソ連側が北の第14装甲軍団の突破に目を向けている頃、カフカスから帰ってきたドイツ第4装甲軍は、南からスターリングラードへと迫っていた。南部でもソ連軍は良好な陣地を用意しており、最初の攻撃は大損害を受けて撃退されたが、第4装甲軍は、得意の機動で堅陣を迂回し、ソ連軍を側面からたたいた。

その効果には驚くべきものがあった。8月30日に防御陣は崩れ、第4装甲軍は北へ進出し、第6軍との距離は30kmほどにまで縮まった。今第6軍が南進すれば、スターリングラード市街前面で敵を撃滅できる。

しかし第6軍は動かなかった。第6軍司令官パウルス将軍は、第14装甲軍団への攻撃が続く中で南へと部隊を回すことは危険だと考え、ソ連軍の圧力が衰えるのを待ち、9月3日になって部隊を南へと動かした。

ソ連側の方は、パウルスよりも早く行動した。第4装甲軍の突破を知ったソ連軍は、部隊を救うために陣地を捨てることを決定し、8月30日までに全陣地から退却を開始した。

包囲は失敗したものの、9月4日までにドイツ第6軍と第4装甲軍はスターリングラード市街へと前進した。ドイツ兵の目に写る市街は連日の爆撃と火災により廃虚と化したようにしか見えなかった。

実際スターリングラードのソ連軍の状況は決して良いものではなかった。市の直前の防御陣地は名ばかりのものだったし、市を守るべき第62軍の部隊は7月以来激しく消耗しており、1個師団の兵員は200人前後にまで減少していたが、補充は望めなかった。このため多少なりとも兵力を増やすため、市民、工場労働者が部隊として編成され、自分の作った兵器で武装した。この軍隊とも言えぬ軍はチュイコフ将軍によって指揮されたが、チュイコフは着任の時「一歩も退くな」との命令を受けておりその任務を忠実に遂行することを決意していた。

ドイツ軍の市街地への攻撃は9月13日早朝、都市中央部で始められた。ドイツ側でも兵力の消耗は激しく、弾薬の補給も充分なものではなかったが、ヒトラーはスターリングラードを望み、第6軍としては、現有兵力での攻撃を実施しなければならなかった。このため、全市への総攻撃ではなく、現有戦力で実行可能な、市街地、埠頭、工場を段階的に落してゆく作戦がとられた。

攻撃は砲兵や航空機の支援が有効な場所では順調だったが、市街地深く進んだドイツ軍が支援を受けられなくなるとともに前進は難しくなってきた。ソ連軍は住宅の一軒一軒を小型のトーチカに変えており、粘り強い防御を続けた。南部の穀物サイロに立てこもった500人の兵士が、重砲兵の直接射撃を受けるまで戦い続けたことは、以後の日々がどのようなものになるかを示していた。

翌15日も市内中央部から南部で攻撃は続き、中央駅、第62軍司令部のあるママエフ墓地などで両軍がぶつかりあい、中央駅はこの日だけで四度まで持主をかえるほどだったが、ソ連軍は第13親衛師団を含む全ての予備を投入して日没まで耐え抜き、ドイツ軍はヴォルガ川進出の決定的戦果を得ることはできなかった。攻撃はこの後10日余り続いたが、15日が戦闘の頂点だった。16日以後ソ連軍が他方面から送られてきた予備部隊をさらに投入したことから、ドイツ軍の前進ははずみを失い、損害だけが増加し続けた。多くの歩兵中隊は定数の1／3の50人しか兵力を持たなかったし、第24装甲師団には30台の戦車しか残っていなかった。9月の末、市の中央部と南部がドイツ軍の手に落ちたところで戦闘は一時的な休息期にはいった。

10月初めの間、両軍はたがいに弱点を探り合い、次の大戦闘にそなえて兵力を補充し再編成につとめていた。第62軍には、ヴォルガの東から着実に増援が送り込まれていたが、第6軍には補充はなく、歩兵一個師団だけが新規の兵力として送られてきただけだった。

10月14日、ドイツは攻撃を再開した。目標は市北部の工場地帯、そこはトラクター工場、「赤いバリケード」工場と云った名前を歴史に刻み込む激戦の舞台となった。

ドイツ軍はここでも工場への接近路を一歩一歩出血しながら進まなければならなかったが夕方までにトラクター工場を3方から囲む位置にまで進出し、偵察隊がヴォルガ河畔に達してソ連軍を二つに分断した。しかしトラクター工場の近くだけで両軍合せて5000人以上の戦死者が出たこの日は二週間にわたる戦いの始まりでしかなかった。

トラクター工場は北部工場地帯最大の激戦の場所となった。工場自体は砲爆撃で廃虚となっていたが、数千人のソ連兵が瓦礫の中で銃を手にドイツ軍を迎えうった。この工場を制圧するために第14装甲師団と第389歩兵師団が投入され、市街戦に不向きな戦車は大損害が生じ、ソ連軍を追い詰めたものの工場から叩き出すことはできなかった。師団に残る戦車は定数の1／8の20台。歩兵2個師団の戦闘員を合せて1個大隊分、10月末、第6軍が市の9割を支配するまでの血の決算はこのようなものだった。

冬が近づきつつあった。ドイツ軍に残された時間は少なく、パウルスは最後の攻撃を命じた。戦力はたしかに減少しているが、ヴォルガ川の結氷がソ連軍に補給難をもたらしたことがそれを打消すだろうし、市街戦のエリート突撃工兵5個大隊が瓦礫とソ連兵を排除するはずだった。

11月11日午前3時の闇に攻撃が始まり、トラクター工場、「赤いバリケード」工場といった廃虚が再び戦場となった。両軍の兵士達は銃で、手榴弾で、スコップで戦い続け、突撃工兵の火炎放射器が全てを焼きつくした。

1日目だけで突撃工兵400人が戦死し、歩兵はさらに出血したが、ドイツ軍は一寸刻みで進み続けた。ヴォルガからソ連軍までの距離は数百、時に数十mしか残されてはいなかったが、ソ連軍は踏みとどまり時には反撃にでた。

攻撃開始後一週間、両軍とも自分たちの血の中に溺れかけていたが、戦闘は終らなかった。あと数日のうちにはどちらが力尽きる。しかし、ドイツ軍にはその数日はなかった。

11月19日、ドン川を守るルーマニア軍に3500門の砲が一斉射撃を開始した。80分間の砲撃の後、濃い霧の中をT34に援護された歩兵がルーマニア軍に襲いかかった。しばらくは持ちこたえていたルーマニア軍も、T34の前にパニックを起こし、戦線は崩壊した。

ドイツ軍この攻勢を予想はしていたが、スターリングラードが兵力を吸い込み続けたため、ドン戦線を強化するための部隊はほとんど存在せず、第22装甲師団とルーマニア装甲師団から成る第48装甲軍団を配置できただけだった。しかもこの両師団の主装備チェコ製38t戦車はT34を破壊することはできなかった。

さらにソ連軍の迎撃を命じられた第22装甲師団の戦車の大半は、防寒用の藁に巣くったネズミに配線をかじられ行動不能になっていた。

ソ連の冬期攻勢「天王星」作戦は予定通りの展開をみ、ソ連軍はほとんど抵抗も受けず進撃を続け、23日には北から進出した第5機甲軍と南からの部隊とが手を握った。ドンとヴォルガの間には30万のドイツ軍が閉じ込められていた。

包囲されたドイツ軍にとって取るべき道は一つしかなかった。スターリングラードを放棄し、ソ連軍を突破し脱出すること。装備のほとんどは失われるだろうが、ソ連軍が包囲陣を固め終らぬ時ならば成功の可能性は高かった。が、脱出への準備を始めていた第6軍司令部に22日に飛込んだのは、「現在地の確保」とのヒトラーの指令だった。

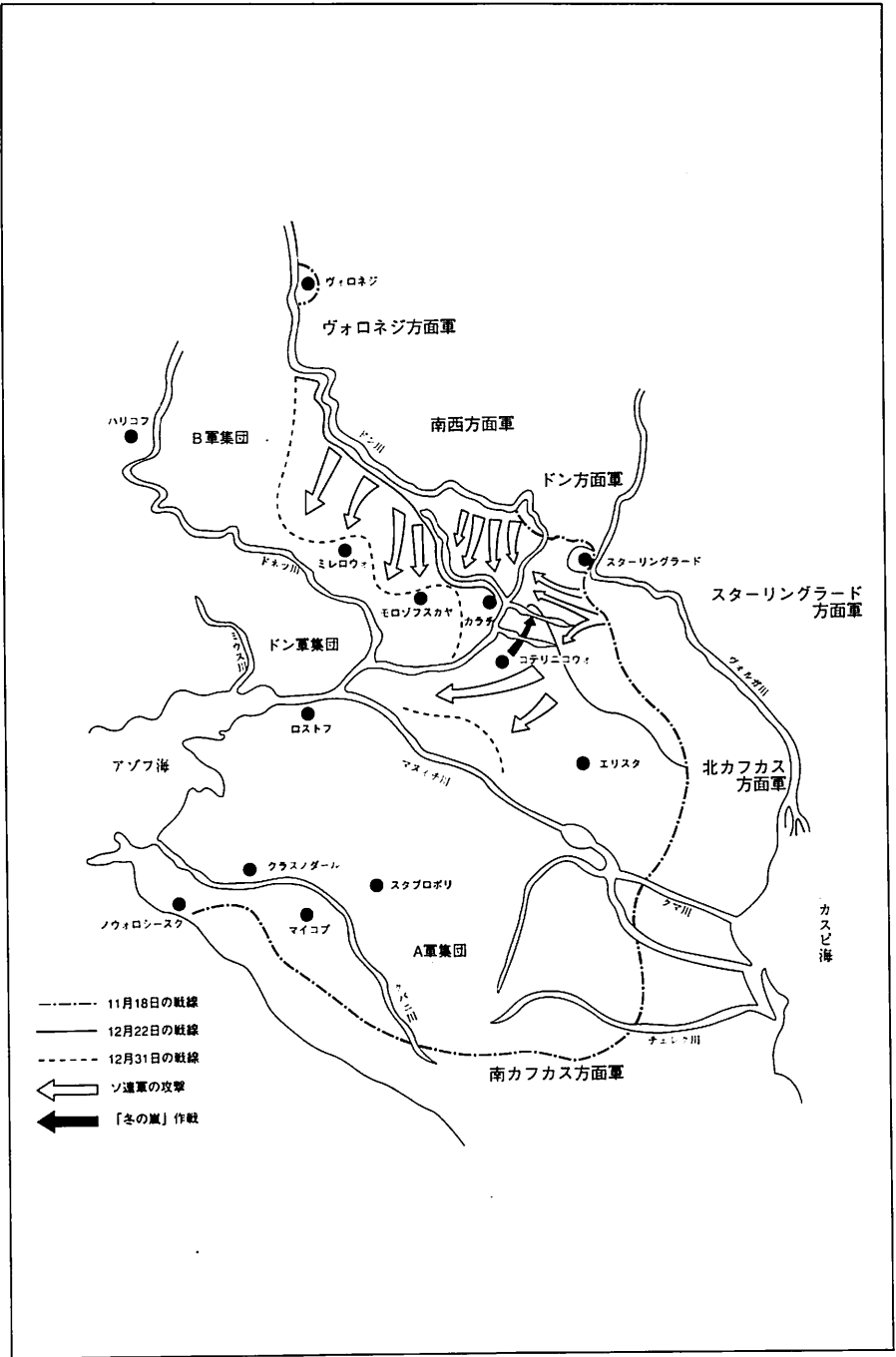
23日、パウルスは燃料、弾薬等の不足から守備は困難であるとして、スターリングラード放棄と軍の脱出を要請した。ヒトラーはスターリンの名の都市を失うことを許さず、24日に「死守、補給は空輸により行う」との総統命令を出し、第6軍がスターリングラードにとどまることが決定された。またソ連軍によってひき裂かれたA、B両軍集団の間の穴を埋めて、最終的に反撃以前の戦線を回復するためドン軍集団が編成され、司令官にはフォン・マンシュタイン元帥が任命された。

マンシュタインがレニングラード戦線を離れ任務についたのは11月24日のことだったが、このとき彼が受取った軍集団はとてもその名に値するようなものではなかった。指揮下の部隊中、第6軍と第4装甲軍の一部は包囲下にあり、ルーマニア第3軍は崩壊寸前、数百㎞の前線は戦車のない戦車兵、工兵、高射砲等を寄せ集めた戦隊によって支えられているだけだった。

この状況下で第6軍救出を実行することはかなり困難で、マンシュタインは大量の増援を要請したが部隊の到着は遅々として進まず、また着いた部隊もチル・ドン河の戦線を守るために差し向けねばならず、救出のため使用することはできなかった。

それでもマンシュタインは第6軍救出のための「冬の嵐」作戦を予定の半分以下の装甲2個師団を主力とする兵力で12月12日に開始した。スターリングラードまでの100㎞余りを走破し、総統命令に反してでも第6軍を撤退させるのが目標とされていた。

ソ連は攻撃された地域に弱体化した歩兵しか配置していず、これらの部隊はドイツの前進を遅らせることはできても止めることはできなかった。そしてソ連軍が急遽送り込んだ増援との5日間にわたる戦いが終った時、救援部隊は最後の地形障害ムイシコワ川

ヴォロネジ
ヴォロネジ方面軍
ハリコフ
B軍集団
ドン川
南西方面軍
ドン方面軍
スターリングラード
ミレロウォ
ドネッ川
モロゾフスカヤ
カラチ
スターリングラード
方面軍
ミウス川
ドン軍集団
コテリニコウォ
ヴォルガ川
ロストフ
アゾフ海
マヌイチ川
エリスタ
北カフカス
方面軍
クラスノダール
スタブロポリ
クマ川
ノウォロシースク
マイコプ
カスピ海
A軍集団
11月18日の戦線
12月22日の戦線
12月31日の戦線
ソ連軍の攻撃
「冬の嵐」作戦
チェレク川
南カフカス方面軍

に達していた。スターリングラードまでは50km。が、ドイツ軍の消耗も激しく、ソ連軍が第２親衛軍をも新たに投入してきたため、救援部隊は攻撃から防御へと移らざるを得なかった。

戦況を好転させるためにマンシュタインは12月19日、第６軍に対して救援部隊に合流するための突破を命令した。だが第６軍は動かなかった。戦車用の燃料不足のため30kmしか行動できないのが理由とされていた。マンシュタインは命令実行を迫り、またヒトラーからも第６軍の脱出許可をもぎとろうとしたが無駄だった。

この数日間のドイツ側の動きの間に新しい事態が生じた。ドン川中流を守備するイタリア軍を狙って、ソ連軍が「土星」作戦を開始した。「イタリア軍に戦死者はない。皆逃げ出した」このドイツ将校の言葉通り短時間でイタリア軍は崩壊し、機甲１個軍を先頭にソ連軍は南下し、12月23日には第６軍への空輸基地が攻撃された。このままソ連軍が前進を続ければドン・Ａ両軍集団が包囲され、東部戦線の兵力の半数150万が失われる。

この危機に対する方法はスターリングラード救出を中止し、装甲部隊を西へ投入することだけだった。最良の装備（戦車は20両強しかなかった）を持つ第６装甲師団がまず西へ向った。

12月末から１月初め、第６装甲師団は第11装甲師団と共同してソ連２個機甲軍団を壊滅させたもののソ連軍の攻勢をくいとめることは出来ず、ドン軍集団は西へと退却を始めた。

第６軍の運命は決った。包囲陣内25万の兵士たちの敵はソ連軍から飢えへと変りつつあつた。ドイツ空軍には第６軍に最低限必要とされた300ｔの物資を運ぶ能力はなかった。

もちろん空軍も努力はしていた。しかし、耐寒装備のない輸送機は地上で凍りつき、飛上がった機体もソ連軍の攻撃と悪天候のため失われていった。11月25日から１月24日までの間に１日平均100ｔの物資が運び込まれ、43000人の負傷兵が後送されたが、その代償は500機の喪失だった。スターリングラードと、同時期の北アフリカへの空輸作戦での損害から、ドイツ輸送機隊が回復することはなかった。

飢え、防寒服と弾薬が不足したためソ連兵の死体から装備をはぎ取るまでになっても第６軍は戦い続けていた。鉄道の中心でもあるスターリングラードの保持は、カフカスからの独軍の退却に対する圧力を弱めることに役立ったからである。このため１月９日に出された降伏勧告は即座に拒否された。

１月10日ソ連７個軍によるスターリングラード総攻撃が開始された。ドイツ軍は必死で抵抗し、砲は弾薬が尽きるまで射撃を続けたが、戦線は打ち破られた。ドイツ兵は市街へと後退し、飛行場が失われたために後送できない負傷者は零下35度の屋外に放置された。

１月25日には第62軍と包囲陣を突破したソ連軍が手を握り第６軍は二つに分断された。ドイツ軍の抵抗が終末に近づきつつあることは明らかだったがヒトラーから下ったのは「降伏は論外。最後まで防戦せよ」の命令だった。

1月31日南部の部隊が、2月2日には北部トラクター工場にあった部隊が降伏し、スターリングラード戦は終った。包囲された25万のうち捕虜となったのは約11万、そして戦後ドイツへ戻ることができたのはわずかに6000人でしかなかった。

◆補給

一日当りドイツ軍師団が必要とする補給品は、装甲師団で300ｔ、歩兵師団で150ｔとされていた。この事から「バルバロッサ」作戦に参加した150個師団が必要とした補給量は一日に30000ｔ近くに達するものと見られていた。

この物資を輸送するためには大量のトラック部隊が、さらにトラック部隊自身のためにも燃料も必要とされる。

実際にはドイツ軍に30000ｔの補給を後方から、進撃につれて遠くなる前線にまで運ぶだけのトラックはなく、補給の主輸送には鉄道を使い、端末駅から前線までがトラック隊の仕事とされていた。

しかし、ロシアの広軌レールを標準幅に変更し、給水所を設置する等の施設整備が遅れたため、能力不足のトラック隊が補給輸送の主役を努めることとなった。

ドイツ軍の前進が一週間で300kmを越すものだったため、7月初旬には最前線の装甲部隊で補給不足が生じるようになった。

以後ドイツ軍の攻勢は常に補給不足に悩まされながら実行され、秋の泥濘に全てが埋まった時には前線には補給を届けること自体ができなかった。

ドイツ軍が防御に転じてからも補給事情は好転することはなく、（戦争後半にはドイツの生産力自体が不足した）補給に関する限り、「バルバロッサ」とそれに続く戦争はドイツ軍にとって完全な失敗だったと言えるだろう。

8 「星作戦」（ステージ6）

スターリングラードで第６軍が消滅しつつあるころ、ソ連軍最高司令部はさらに大規模な作戦の準備を続けていた。攻撃を担当するのはヴォロネジ、南西、南、北カフカスの４方面軍。計画はヴォロネジ方面軍がハンガリー軍を攻撃し、Ｂ軍集団を撃破してハリコフに進出、南西、南の二方面軍はドン川中流を突破ロストフを占領し、Ａ、ドン軍集団を壊滅させるという、600㎞を越える南方全戦線を舞台とした野心的なものだった。

ソ連軍内部でもこの計画に対しては、参加する兵力が11月以来戦闘を継続していることや、主要攻撃方向が南西と西に直角をなすため、両方面軍の前進により生じる隙間が攻勢の弱点になる等の点から反対も多かったが、スターリンはドイツ軍の戦力低下や雪解けまでの日数の少なさを理由に攻勢計画を「星作戦」として承認した。

１月13日にヴォロネジ方面軍の攻撃を受けたハンガリー軍は簡単に撃破され、250㎞にわたって崩壊した戦線の中でドイツ第２軍はヴォロネジ地区に孤立し、ソ連軍の先頭部隊は150㎞西方へと進出した。これに続いて開始された南西方面軍の攻撃も、ルーマニア軍の残存部隊を短時間で一掃して２月初めにはドネツ川に達し、ドン軍集団を背後から襲うことが可能となっていた。

ドン軍集団としてもこの危機については充分に承知していたが、カフカスから退却中の第１装甲軍がドンを越すまでは、東に大きく張りだしたドン河沿いの戦線を保持しなければならなかった。

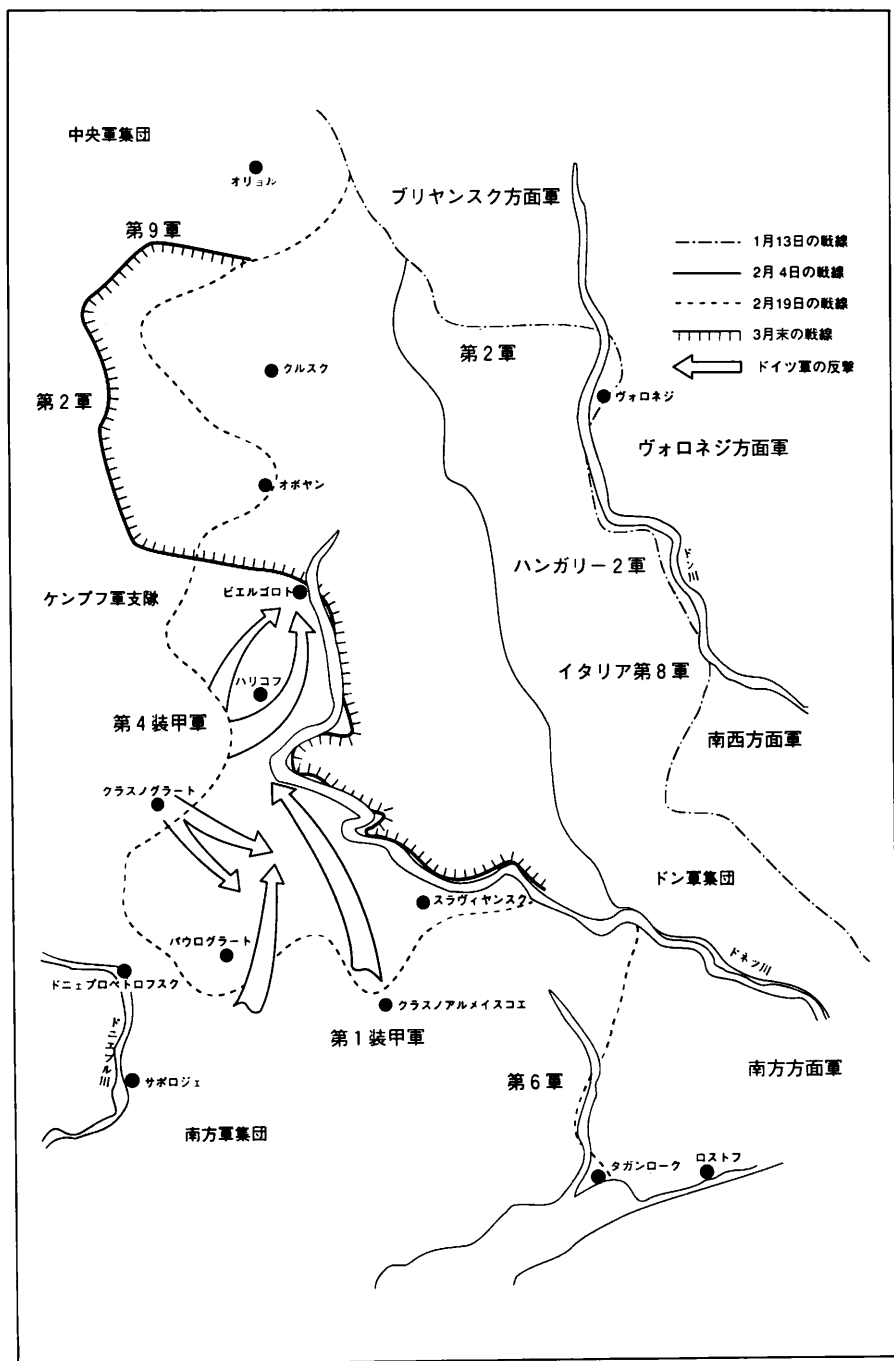
１月31日に第１装甲軍がドンを越えると、ドン軍集団司令官マンシュタイン元帥は危機打開のために全勢力を傾けた。

マンシュタインの計画は、ドン川沿いの戦線をミウス川までの退却によって短縮、そこには最小限の戦力のみを残し、全装甲部隊を進撃中のソ連軍にぶつけるという大胆なものだったが、この作戦の実行のためマンシュタインは二つの敵、ソ連軍とヒトラーと戦わねばならなかった。

最初の戦いはヒトラーとだった。この時点でも「死守！」と叫び続けるヒトラーからまず退却許可を得ねばならなかった。マンシュタインはこの戦いに勝利し、部隊をドン河から100㎞ほど後方のミウス河に退却させることには成功したが、貴重な装甲戦力であるＳＳ装甲軍団がハリコフ死守（この場合全滅と同義語）を命じられるのを防ぐことはできなかった。しかし、ＳＳ装甲軍団はヒトラーの命令を無視して包囲されたハリコフから脱出した。

この事件はヒトラーを激怒させたが、スターリンもこれに強い印象を受け、ヒトラーの私兵である武装ＳＳの退却は、ドイツ軍全面的退却の象徴との誤った結論を引き出した。前線部隊に「前進を続け、ドイツ軍を捕捉せよ」との命令が飛んだ。

この命令と状況判断を受け、南西方面軍とヴォロネジ方面軍は西へ、南西へと進み続

中央軍集団
オリョル
ブリヤンスク方面軍
第9軍
1月13日の戦線
2月4日の戦線
2月19日の戦線
3月末の戦線
ドイツ軍の反撃
クルスク
第2軍
第2軍
ヴォロネジ
ヴォロネジ方面軍
オボヤン
ハンガリー2軍
ドン川
ケンプフ軍支隊
ビエルゴロト
イタリア第8軍
ハリコフ
第4装甲軍
南西方面軍
クラスノグラート
ドン軍集団
スラヴィヤンスク
パウログラート
ドネツ川
ドニェプロペトロフスク
クラスノアルメイスコエ
第1装甲軍
ドニェプル川
南方方面軍
サポロジェ
第6軍
南方軍集団
タガンローク
ロストフ

けた。ドイツ装甲部隊が側面にあるとの情報は、ドニエプルへ退却中の敗残兵と見なされたし、攻勢開始点から200km近く進んだことによる補給の困難さも無視された。

マンシュタインの反撃は２月20日に始まった。最初に狙われたのは燃料不足から前進の止った南西方面軍副司令官ポポフ中将の指揮する機甲部隊と第６軍で、ＳＳ装甲軍団と第40装甲軍団を主力とする７個師団の機械化部隊が攻撃に参加した。

三日間の戦闘でポポフ部隊は壊滅し、第６軍は寸断されてしまった。ポポフ中将は退却を要請したが、ドイツ軍後退の幻想を信じた上級司令部からの命令は「前進を続行せよ」だった。ポポフ部隊は全滅した。

このことを知った南西方面軍は全部隊に防御に移ることを命じたが、命令が出るのが数日遅すぎた。ドイツ軍装甲部隊は２月28日までにドネツ川に達し、南西方面軍の攻勢部隊は600台の戦車を失い23000の戦死者をだして消滅した。

この結果、南西方面軍の右翼で戦っていたヴォロネジ方面軍の南側面に200kmにもわたる穴が開いた。この穴を埋めるためヴォロネジ方面軍は、第３機甲軍をハリコフ防衛のため西から南へと方向転換させた。

３月２日、南へ向う第３機甲軍の側面にＳＳ装甲軍団が襲いかかった。行軍隊形のソ連軍の中を新鋭のタイガー重戦車を含むＳＳ装甲部隊が駆け抜け、射撃を続けた。２日後、ハリコフを守るための２個機甲軍団と歩兵３個師団もまた壊滅していた。

３月中旬、ＳＳ装甲軍団はさらに北進し、数日間の戦いの末ハリコフを奪回した。ソ連軍はドイツ軍の足を止めてくれる雪解けの泥を期待したが、気温はなかなか上がろうとはしなかった。

ドイツ装甲部隊はさらに北に向って進み続けた。この進撃がビエルゴロトを通ってクルスクへと進出すれば、西へひろく突出したヴォロネジ、中央両面軍も全滅することになる。ソ連最高司令部は最後の予備部隊の２個軍、第21、64軍をビエルゴロト守備のため使用することとした。このうち第21軍はまだしも、第64軍はスターリングラード戦での大損害から回復しておらず通常の１／10程度の戦力しか持ってはいなかった。しかし他の方法も部隊もなかった。

ドイツ軍にとっても今が最大のチャンスだった。クルスク突出部のソ連軍撃滅はスターリングラードの敗北を打消すほどの戦略的な勝利になる筈だった。マンシュタインは麾下の装甲部隊に北進を命じ、中央軍集団に北方からの攻撃を要請した。

だがこの二つの行為はどちらも成功しなかった。ＳＳ装甲軍団がビエルゴロト市街を占領した３月16日に気温が上がり、戦場は泥沼に変り、ソ連軍の抵抗の強化と共に戦闘は停止した。また北方からの攻撃も、麾下部隊の疲労を理由にして中央軍集団によって拒否された。

こうしてソ連軍の冬期攻勢とそれに続く南方集団（２月１４日にドン軍集団から改称した）の反撃は泥の中に終り、後には東西100km、南北200kmの巨大なクルスク突出部が残された。

◆タイガー

1942年夏に登場したドイツの重戦車。もともとはフランス戦で遭遇した英仏の重戦車に対抗するために開発された車両だった。

ヘンシエル製、ポルシエ製の２種の誌作車からヘンシエル型が採用され、ポルシエ製は駆逐戦車エレファントに改造された。

1942年の生産開始とほぼ同時にレニングラード戦線に投入されたが、戦車には不向きな森林地帯で行動したため対戦車砲の餌食となり初陣を飾ることは出来なかった。

しかし秋のチユニジアの派遣以後、1000ｍで122㎜の装甲貫徹力を持つ88㎜砲と最高で120㎜に達する重装甲の威力で連合軍戦車を圧倒し、戦争後半の主要戦場での活動は、敵味方を問わず戦後にまで続く伝説を作り上げることとなった。

タイガーは、重量、燃費の悪さ、低機動性等の欠点を持っていたが、戦争後半ドイツが防御に回ったため、これらの欠点があまり問題とされることはなかった。

タイガーはほとんどの場合、３個中隊編成の重戦車大隊に編成され、作戦時には中隊単位で各師団に配属されて行動した。

1944年後半には、より大重量、重装甲のタイガーII（キングタイガー）も登場したが、これはタイガーとは別設計の車両である。

タイガー主要要目

全長：8.45m　全幅：3.73m　全高：2.86m　重量：56ｔ
乗員：５名　エンジン：700馬力　最高速度：38㎞　行動距離：117㎞
武装：88㎜砲×1、機銃×２　装甲：120㎜～60㎜

◆9◆「クルスク」(ステージ7)

1943年春。東部戦線の戦闘が泥の中に休止した頃、ドイツをめぐる情勢は悪化する一方だった。ソ連ではスターリングラードの降伏により25万の戦力が失われていたし、北アフリカではドイツ軍はチュニジアの橋頭堡に追い詰められて降伏寸前だった。

それでも絶望的なまでの状況ばかりでもなかった。反撃の成功により東部戦線は安定していたし、総力戦にはいった軍需産業は去年に倍する量の戦車、飛行機を前線へと送りだしていた。

これらの状況からしてドイツ軍に必要なのは、予想される連合軍の大攻勢を撃破するための戦力を回復することと考えられた。

特に戦闘で主役を演じるべき装甲師団の損耗は激しく、3月末には1個師団あたり27両の戦車しか持ってはいなかった。装甲師団が計画当初500両の戦車を装備する予定だったことを思えば、現在の装甲師団の戦力はその影にすぎなかった。

装甲兵監グデーリアンは、我が子同然の装甲師団の戦力回復のために全能力を傾けた。その最終的な目標はT34以上性能を持つのパンサー戦車2個連隊から成る戦車旅団を中心とする師団だったが、全装甲師団の改編が終るのは1944年と予定され、前線の戦車連隊は突撃砲をも取り込んで2個大隊分の車両を集めるのがやっとのことだった。

戦力回復の動きと共に、来る夏のための方針も検討されていた。ドイツ軍が全面的防御に移れば中立国や同盟国が反ドイツに回るとの政治的理由から防御策は放棄され、現有戦力で可能な限定攻勢を実施することが決定された。

この攻撃の場所として選ばれたのがクルスク周辺に広がる南北200km、東西100kmの突出部だった。攻撃の成功による戦線の短縮は全戦線で必要とされる予備部隊を作るだろうし、戦闘での捕虜もドイツ工業の労働力として使用される予定だった。

4月15日にクルスクに対する攻撃計画は「城塞」作戦として承認されたが、それは5月初旬に開始される北からの第9軍と南の第4装甲軍による古典的挟撃作戦となるはずだった。

計画に対する反対が攻撃を担当する第9軍司令官モーデル将軍から起こった。将軍の言葉によれば、第9軍の戦力は12kmの深さを持つソ連軍陣地を突破するには不十分だとのことだった。モーデルの言葉に影響を受けたヒトラーは、攻撃戦力を増加するために、「城塞」を数日間延期した。

この延期は数日から、数週間へと引延ばされていったが、タイガーやパンサー、エレファント等の新型車両を攻撃に追加するだけがその理由ではなかった。

問題とされたのはイタリアだった。5月のチュニジア陥落によってファシスト政権は動揺しており、連合軍のイタリア侵攻によって最悪の場合には連合国側に寝返ることさえ予想された。これを阻止するためイタリア占領計画が準備されたが、その兵力は「城

塞」用のものから引きく抜くしか方法がなかった。

6月25日、「城塞」の開始は7月5日に決定された。当初予定されていた5月初旬からは2ヶ月が過ぎようとしていた。

だが、ソ連側は各種情報網を利用して「城塞」についてほぼ正確に、兵力、目標等を察知していた。これら情報の検討の末、「城塞」を強力に防御してドイツ軍を消耗させ、その後クルスクの南北に広がるハリコフ、オリョール両突出部への攻勢を行うことが決定された。

この決定に従いソ連側はクルスク突出部を徹底的に強化することにした。ドイツ軍の攻勢正面にはそれぞれ5～6㎞の深さを持つ陣地が三層の深さに設置され、それぞれに数㎞の塹壕と1㎞あたり1500個の密度の地雷源が構築された。加えてパックフロント戦術がドイツ戦車の威力を封じる手段として大規模に使用されることになっていた。

この陣地を守るのは、砲1万門と戦車、自走砲2500両を持つ中央、ヴォロネジの両方面軍であり、その後方には5個軍を持つステップ方面軍が予備として控えていた。

7月2日、ソ連軍前線司令官にモスクワから「ドイツ軍攻勢は7月3～6日間に開始」との情報が飛込み、クルスク地区のソ連軍は警戒体制にはいった。

7月4日夜、中央方面軍司令官ロコソフスキー将軍のもとに捕虜からの情報として、ドイツ軍が明朝3時の攻撃開始のため出撃陣地にはいったとの連絡があった。

ロコソフスキーはこの報告を聞くと、砲兵隊に先制対抗射撃を命令した。午前2時20分、ドイツ側の砲撃開始10分前にソ連軍の砲弾がドイツ軍陣地に降りそそぎ、ドイツ軍を混乱におとしいれた。

ドイツ側も予定よりは多少遅れて、2400門の砲による東部戦線始まって以来の猛砲撃の火蓋を切った。

午前5時30分、第9軍の突撃部隊が出撃した。モーデル将軍は縦深陣地を突破する方法として、歩兵が突破口を開きその穴から装甲部隊が前進するとの戦術を選んでいた。そのため第1波の攻撃を受け持つのはタイガーと突撃砲に支援された歩兵の任務とされていた。

歩兵が出撃陣地を出ると同時にソ連軍の砲火が交差し、敵最前線の壕に着くまでに多くの兵が脱落した。ドイツ軍兵の前にはさらにいくつもの塹壕があり、その一つ一つを奪うために歩兵は出血し、数百mの前進のために数時間がかかり数千人が死んでいった。

この突破を支援するために、第9軍は85台の駆逐戦車エレファントを投入していた。最大装甲200㎜、88㎜砲を装備するエレファントは突破に対して決定的な働きをするものと期待されていたが、戦場でのエレファントの働きはぶざまなものでしかなかった。

200㎜の装甲は確かに砲弾を寄せつけなかったが、それに続く歩兵は銃火に射ちすくめられて前進することができなかった。そのためエレファントは単独で前進したが、機銃もないエレファントにはソ連歩兵の肉迫攻撃に対抗することはできず、次々と撃破されてゆくこととなった。

5日午後になっても第9軍は5㎞しか敵陣に侵入できなかった。このためモーデルは方法を変え、装甲師団を陣地突破のため使用することとした。

7月6日、4個の装甲師団が戦場に登場した。攻撃目標はオルホウァトカ村とその背後の高地帯、ここを越えればクルスクまでなだらかな下りが続くだけ。しかしソ連軍もオルホウァトカに戦略予備軍から、2個機甲軍団を中心とする兵力を送り込んでいた。15㎞の戦線で2000両近い戦車がぶつかり合うオルホウァトカ高地帯の戦闘は4日間続き、戦場上空に立上る黒煙が夏の太陽をかげらせた。ドイツ軍は陣地の突破を狙い数波に渡る波状攻撃を行ったが、オルホウァトカ高地を抜くことはできなかった。部隊は次々と消え、大隊には中隊兵力しか残らなかった。それでも生残り達は攻撃を続けた。

7月8日、最後の装甲予備第4装甲師団が他の生残った部隊と共に高地帯の西端テプロエ村に迫った。村とその背後には2個歩兵師団、2個機甲旅団、対戦車1個旅団が待ちかまえていた。

第4装甲師団はテプロエ村を占領、ソ連軍を高地へと追いやった。その後の高地への前進は再び集中砲火に迎えられたが、Ⅳ号戦車3両に支援された擲弾兵たちが高地を占領した。ソ連軍も反撃し、テプロエの西272高地をめぐる3日間の戦いで3度目にドイツ軍が高地から追いおとされた時、ドイツ軍の攻撃能力は失われていた。

7月11日、　モーデルが全予備隊を戦場に投入したのを知ったソ連西、ブリヤンスク両方面軍はオリョール突出部の北部に対して攻撃を開始した。クルスクに全てをつぎこんだため、この方面のドイツ軍の兵力は薄く、突破を防ぐためには、装甲部隊を「城塞」から引抜かなければならなかった。

モーデルの攻撃は終った。

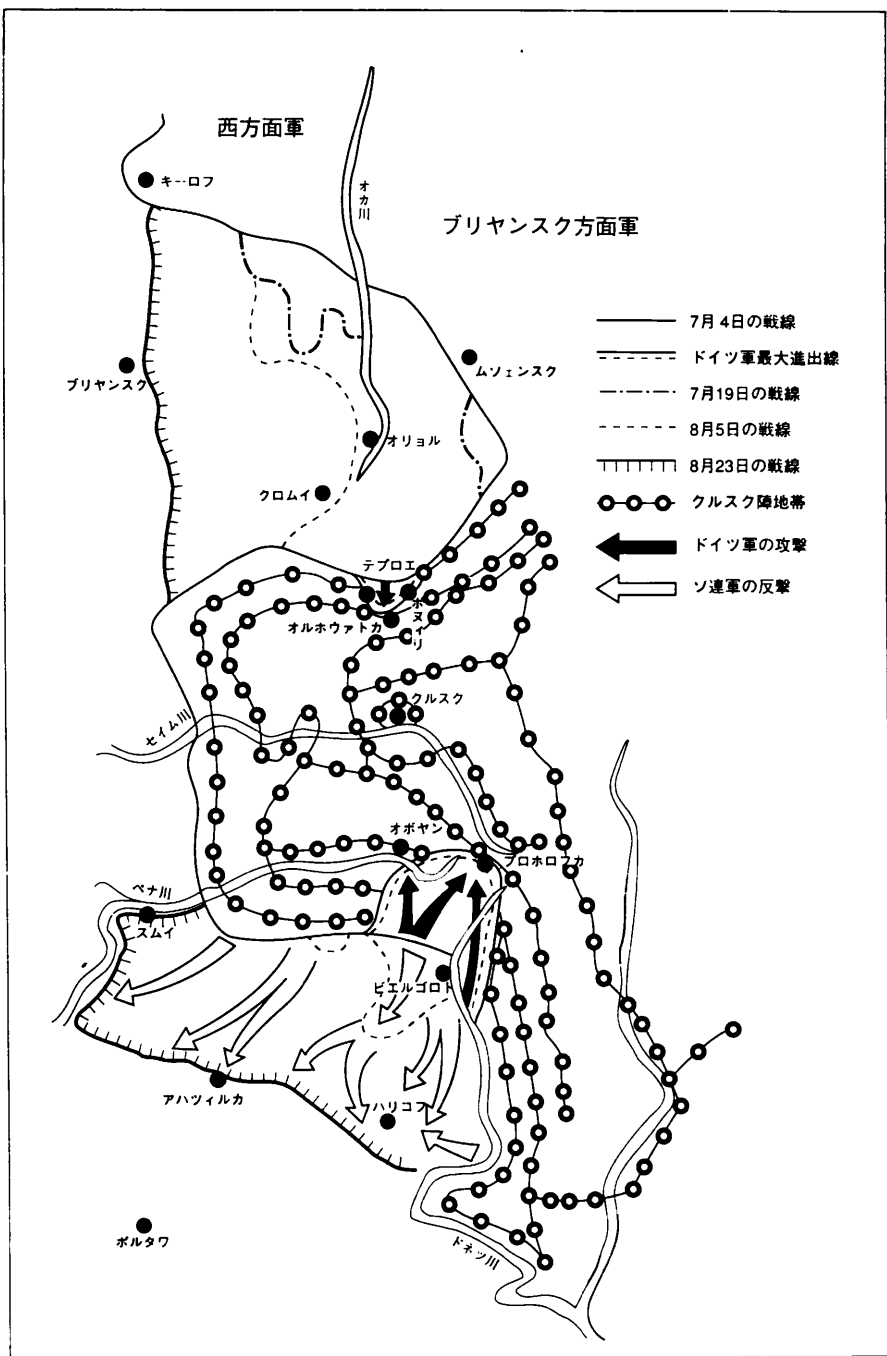
クルスク突出部南方では、攻撃は砲兵の観測地点を得るため7月4日午後には始まっていたが、5日、ポーランドとフランスで消費された以上の砲弾を50分で射ち込んだ砲撃のあと展開されたのは北とは違った戦い方だった。

第3、48、SSの3個装甲軍団の全戦力は初日から投入されて、1500両の戦車、突撃砲の火力と装甲がソ連軍を打ち砕くことになっていた。各装甲師団は突破のためのパンツァー・カイル隊形を組んで地雷とパックフロントに守られた敵陣にしゃにむに突っ込んでいった。

この戦い方はおおむね成功し、第4装甲軍の各部隊は5日に10㎞近く敵陣にくいこむことに成功したが、損害も大きかった。

特に左翼第48装甲軍団の主力、大ドイツ装甲擲弾兵師団では突破の主力たるべきパンサー戦車の故障の多さー移動中に発火炎上したものさえあるーもあって多大の損害が生じていた。

7月6日にも突撃部隊はソ連陣地の中にいた。ソ連軍は村を要塞化しており、家一軒一軒をⅢ号火炎放射戦車と工兵がつぶしてゆかねばならなかった。加えてソ連軍はドイツ軍が足を止めると戦車による反撃をかけてきた。

西方面軍
ブリヤンスク方面軍
キーロフ
オカ川
ブリヤンスク
ムツェンスク
オリョル
クロムイ
テプロエ
ポヌイリ
オルホウァトカ
クルスク
セイム川
オボヤン
プロホロフカ
ペナ川
スムイ
ビエルゴロド
アハツィルカ
ハリコフ
ポルタワ
ドネツ川
7月4日の戦線
ドイツ軍最大進出線
7月19日の戦線
8月5日の戦線
8月23日の戦線
クルスク陣地帯
ドイツ軍の攻撃
ソ連軍の反撃

７月７日には第48装甲軍団が再び前進し、第１次目標オボヤン前面の地形障害ペナ川に達していた。ソ連側はここでＴ34を先頭に反撃をかけたが撃退され、第48装甲軍団は７月11日には陣地ごとに多大の出血を受けながらもクルスク前面最後の地形障害プショル川を越え、ＳＳ装甲軍団もその東に並んでいた。

ヴォロネジ方面軍ではもはやこの脅威に対するための兵力はなかった。方面軍の予備部隊は全て投入され、その多くは大損害を受けて後退し、一部は消滅していた。

ソ連軍最高司令部はこの危機に対して予備のステップ方面軍から、第５親衛、第５親衛機甲の２個軍を引抜いて南下させた。

ドイツ側でも、新たな予備の投入には気づいていた。特に右翼の第３機甲軍団の遅れから敵中に突出した形となっているＳＳ装甲軍団の危険は大きかった。このため第４装甲軍司令官ホト将軍は、ＳＳ装甲軍団にプショルとドネツの間、プロホロフカ地峡で守備につき第３装甲軍団を待つように命令した。

７月12日の朝、第５親衛機甲軍は800台の戦車をＳＳ装甲軍団の防御線に向けて前進させた。迎撃するＳＳ軍団の戦車、自走砲は300両、長い一日の夜が明けた。

プロホロフカで起こったのはこの数日間とは全く逆の戦闘だった。ソ連軍が突撃し、陣地こそないもののドイツ軍が高火力で迎撃する。その後の展開もこの数日と似たようなものだった。

午前６時半に前進を開始したソ連戦車旅団の攻撃は簡単に撃退されたが、９時過ぎには200両以上の戦車による攻撃がはじまった。ＳＳ部隊も全火力を集中したが、Ｔ34の何割かはドイツ軍陣地に迫り、数10ｍ単位で両軍が衝突した。

対戦車砲は次々とＴ34を炎上させたが、撃ちもらした戦車のために蹂りんされた。擲弾兵は地雷を持って戦車に立向かい、戦車同士は衝突寸前の距離で交戦した。これまでは無敵だったタイガーの装甲も至近距離からの砲弾には無力で、数両のＴ34を道連れにして破壊された。

破壊炎上された車両が増えるにつれて視界は悪化していき、司令部も戦況をつかめないまま夜まで戦闘が続いた。戦場では擱坐した車両のあげる炎が闇を照し続けていた。

プロホロフカをめぐる一日の戦闘だけで、両軍は500台の戦車を失った。両軍とも、自軍の勝利を信じ明日の攻撃に備えたが、戦闘はこれ以上は続かなかった。

ヒトラーが７月13日「城塞」作戦の中止を命令したのだった。その理由はシシリー島に対する連合軍の上陸だった。イタリアに送る増援は「城塞」用の部隊から捻出するしかない。

マンシュタインは反対したが、実際に部隊が引抜かれては攻撃を中止するしかなかった。参加兵力の１／３を失い、北で10㎞、南で30㎞を進んだだけでドイツ軍最後の大攻勢は終り、ドイツ軍は多量の損傷した兵器を残したまま出撃地点へと後退せねばならなかった。

数ケ月かかって再建された兵力が消え、東部戦線の予備兵力は激減した。中でも装甲

部隊の傷は深く、それは終戦まで癒されることはなかった。

ヒトラーは戦車2500両を含むソ連軍の損害を見て、敵も攻撃力を失ったものと判断していたが、ソ連軍は数日の内に損失の大部分を補充し攻撃体制へと移行していた。そしてこの後、東部戦線でドイツ軍が主導権をにぎることは二度となかった。

◆パンサー

T34にショックを受けたドイツ軍がT34以上の戦車を目指して作り上げた中戦車。距離1000mで135㎜の装甲貫徹力を持つ長砲身75㎜砲を装備し、T34に影響されたドイツ戦車では最初に傾斜装甲を採用した車体が特徴となっていた。

パンサーは1943年7月のクルスク戦で初めて実戦に参加したが、充分な試験期間を置かず使用されたため故障が続発し、作戦開始時の300両が10日後には行動可能車両は16両しか残らなかった。

その後戦訓による改良が重ねられ、最終生産型のG型では、武装、装甲、速力のバランスの取れた高性能の戦車となった。

1943年以後のドイツ装甲師団は戦車連隊中に1個大隊のパンサーを装備することになっていたが、多くの場合本国で編成されたパンサー大隊は独立部隊として使用されたため、（ソ連で戦闘中の装甲師団のパンサー大隊がフランスで戦ったこともある）多くの師団はⅣ号装備の1個大隊のみで戦う事になった。各師団が固有のパンサー大隊を戦車連隊内に持つことが出来るようになったのは1944年後半のことだった。

パンサー主要要目(G型)

全長：8.86m　全幅：3.42m　全高：3m　重量：44.8t
乗員：5名　エンジン：700馬力　再高速度：55km　行動距離：200km
武装：75㎜砲×1、機銃×3　装甲：100～40㎜

10 ドニエプルへの競走

ハリコフ突出部に対するソ連の攻撃は、戦略予備のステップ方面軍をもクルスクでの防戦につぎこんだため、予定よりはるかに遅れて8月3日に開始された。

ドイツ軍もこの時間を利用してハリコフ突出部を陣地化していたが、クルスク戦で弱体化した第4装甲軍は攻撃を支えきれず1日で15km後退し、8月5日にはビエルゴロトが解放された。

このビエルゴロトと、北部でのオリョール同日解放を祝して、開戦以来初めてモスクワで祝砲が打たれたが、これはこれ以後の退却はないとのソ連側の自信のあらわれでもあった。

ハリコフ戦区にドイツ装甲師団がいなかったこともあって戦線に開いた穴は50kmまでに広がり、その穴を通って第5親衛機甲軍が西と南西に100kmの深さに侵入し、ハリコフは北西から半ば包囲されることとなった。

ヒトラーは例によってハリコフの死守を命じ、機動戦に必要な装甲師団をも包囲の輪の中に送り込んだ。

マンシュタインは西へ向う第5親衛機甲軍を装甲部隊の反撃によって阻止することができたが、ハリコフに対して打つ手はなかった。8月22日、ハリコフの消耗しきった守備隊は、残されたただ一本の道路を利用して南へと脱出した。

8月末までの戦闘でハリコフ突出部は掃討されたが、ソ連軍は目標であるドニエプルへの突破を達成することは出来なかった。しかしギリギリにまで引延ばされ、前線に予備を全て投入して繕われたドイツ戦線が再び破れるのは時間の問題でしかなかった。

マンシュタインはヒトラーに、ドニエプル川への退却か、現在地の守備に必要な増援を送るかの二者択一を迫ったが、ヒトラーは撤退命令も増援も送らなかった。

ソ連側の攻撃は続いた。8月28日にはミウス川の戦線が破れ、1個軍団が包囲された。包囲下の軍団は自力で脱出したがその遥かな北ではドネツが突破され、ハリコフの西でも攻勢の準備が続いていた。戦力低下した装甲師団群はそれぞれの危機に対して使用され、日に数百kmを走り回りソ連軍を阻止したが、ドイツ戦線はもはや存在しなかった。

9月15日にようやく、南方軍集団にドニエプルへの退却命令が出された。ドイツ軍は川へ向って退却を始めた。ドニエプルにある6つの渡河点めざし100万人の兵士が西へ急いだ。ソ連軍より1秒でも早く西岸へ渡らねばならない。

9月後半、ウクライナの平野は西へ向う巨大な行列でいっぱいだった。ドイツ軍が先行し、ほとんど間をおかずソ連軍がそれを追う。攻勢開始点からところによって300kmも前進したソ連軍の補給は欠乏していたが、日に75kmに達する速度で追撃が続けられた。

ドニエプル河を越えるのは、ソ連軍が数時間だけ早かった。9月21日の深夜、パルチザンの協力を得た1個大隊がブクリン地区で橋頭堡を作り、数日のうちにデスナ、ドニ

エプル合流点の南に、23個所の橋頭堡が出現した。

ドイツ軍はこれらの橋頭堡に対して川を渡った部隊を休息させる時間も惜しんで投入した。多くの橋頭堡は簡単に封じ込められたが、いくつかは拡大を続けた。そのうちのひとつにブクリン橋頭堡があった。

ブクリン橋頭堡は数日のうちに5〜7㎞の奥行を持つほど拡大されていたが、ドイツ軍の対応もはやく、数個師団がブクリンへと向っていた。守備が固まっては橋頭堡は無価値となる。ソ連軍は冒険を試みた。ドイツ軍の到着を送らせるために9月25日早朝、空挺旅団3個がブクリンの南に降下したのである。だが、ドイツ軍の真上に分散して降下した空挺部隊は全滅し、2個装甲軍団がブクリンを封鎖した。

ソ連軍はブクリンをあきらめると、他の有望な橋頭堡を物色した。二ケ所ほど有望なは場所があった。ひとつはキエフ北方のリュテジ、南ではドニエプル大湾曲部中間のクレメンチューク。

10月中旬、クレメンチュークの橋頭堡から第2ウクライナ方面軍がドニエプル湾曲部のドイツ軍の包囲を狙い、南へ向って攻撃を始めた。戦線は大きく破れた。

ドイツ軍の最良の選択は湾曲部からの退却だったが、ニコポリのマンガン鉱を欲したヒトラーは湾曲部からの撤退を認めなかった。このためドイツ軍は装甲師団をも投入して防御を続けたが、ソ連軍の進出によりチェルカッスィーからドニエプロペトロフスクまでのドニエプルを放棄し、100㎞近く後退せねばならなかった。

危機は同時にリュテジでも生じていた。ブクリンでの出撃をリュテジに切換えたソ連軍は10月以後、第3親衛機甲軍を含む大部隊をリュテジへと集結させ、20㎞四方に4個軍が密集していた。

11月3日、2500門の砲が10㎞たらずの前線に40分に渡って鉄と死を投げつけた。その後にT34にしがみついた歩兵の大群が続く。砲撃で麻痺したドイツ兵は攻撃を阻止できず、ソ連軍は10㎞の深さにまで前進した。

攻撃がキエフに向うのを見て取ったドイツ側も装甲部隊を呼び寄せたが、ソ連軍を停止させることはできなかった。

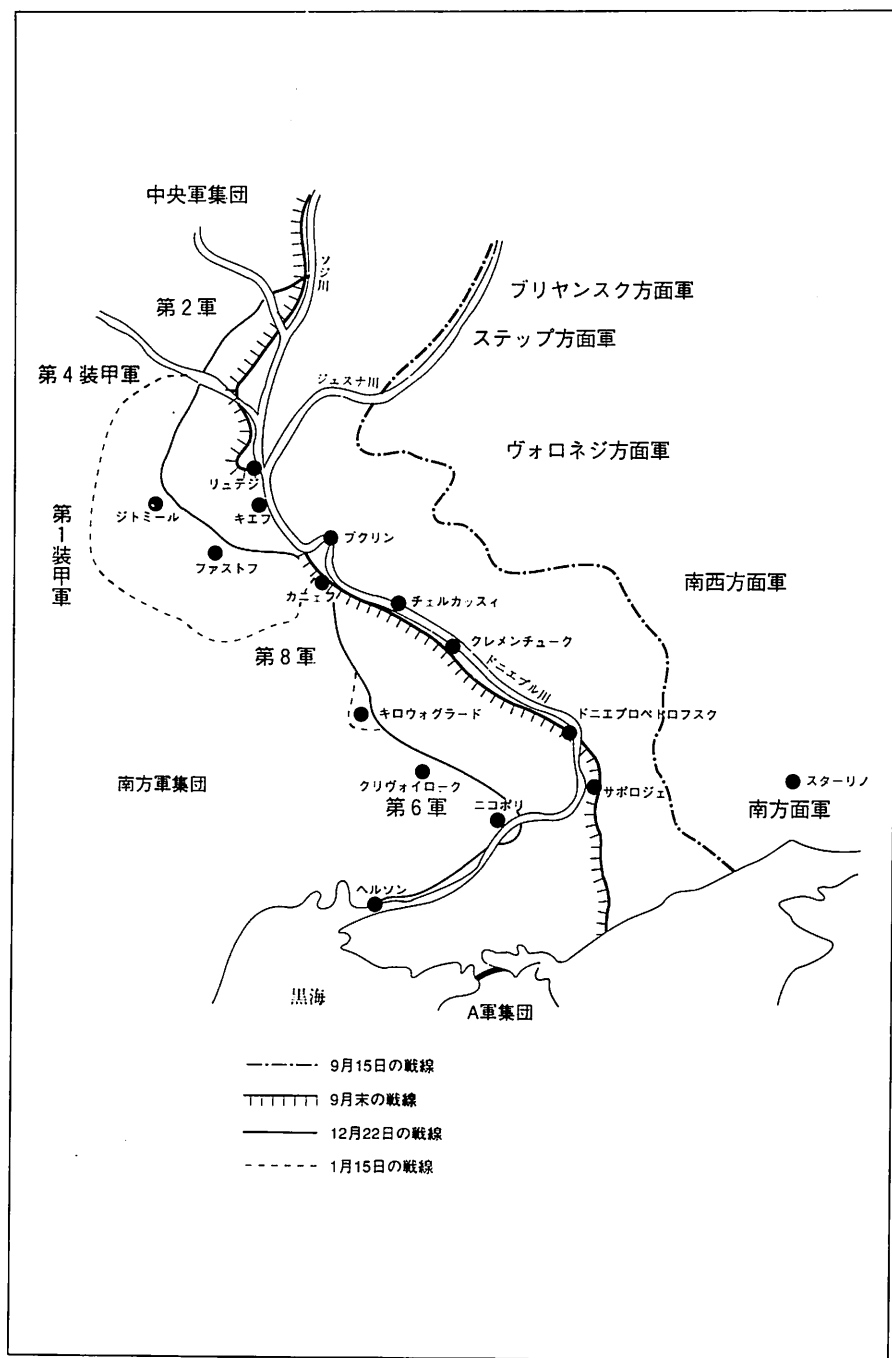
11月7日、革命記念日にキエフは解放されたが、勝利者たちはパレードもせず進撃を続け、11月13日にはキエフ西120㎞のジトミールが解放された。

ジトミールの陥落によって南北を走る鉄道が分断され、これにより中央、南方軍集団の唯一の直接連絡路が切断されることとなった。

今度ばかりはヒトラーの反応も素早かった。第1装甲、ＳＳアドルフ・ヒトラー師団を含む6個装甲師団がキエフ奪回のために呼び寄せられ、第48装甲軍団として投入された。

前線部隊はキエフの直接攻撃を望んだが、上級司令部は最初にジトミールを奪回し、その後キエフに進出する作戦を選んだ。

11月15日攻撃が始まり、2日後にはジトミールが奪回された。ソ連軍は機甲2個軍団を集結させて第48装甲軍団の側面に反撃を加えてきたが、第48装甲軍団も逆襲し、ソ連

中央軍集団
ソジ川
第２軍
ブリヤンスク方面軍
ステップ方面軍
第４装甲軍
ジェスナ川
ヴォロネジ方面軍
リュテジ
キエフ
ジトミール
第１装甲軍
ブクリン
ファストフ
南西方面軍
カニェフ
チェルカッスィ
クレメンチューク
第８軍
ドニエプル川
キロウォグラード
ドニエプロペトロフスク
南方軍集団
クリヴォイローク
サポロジェ
スターリノ
第６軍
ニコポリ
南方面軍
ヘルソン
黒海
A軍集団
9月15日の戦線
9月末の戦線
12月22日の戦線
1月15日の戦線

軍の主力を逆に包囲した。これは戦術的には大きな成功だったが、初雪とともに大地は泥沼と変り、部隊の動きは止った。

泥がもたらした休止期間を両軍はフルに利用したが、ソ連軍が確実に補充を受けたのに対して、ドイツ軍が損失を埋めることはほとんどできなかった。攻撃開始時それぞれ66、115両の戦車を装備した第８装甲､アドルフ･ヒトラー師団に残った戦車は７両と40両にすぎなかった。

凍結と共に先手を打って戦闘を再開した第48装甲軍団は再びソ連軍を包囲したが、この戦果を拡大する前にソ連軍が攻勢に転じた。

12月23日以後、第１ウクライナ方面軍はキエフ西方の広い戦線を崩壊させていた。攻勢は24から28日にかけて300kmの幅で展開されて100kmを前進し、再びジトミールを解放した。

第48装甲軍団は攻勢を阻止するために第１ウクライナ方面軍の主力に反撃を加えたが何の効果もなく、ソ連軍の西への進撃は１月４日旧ポーランド国境を越えた。もはやキエフ西方には戦線はなく、ドイツ軍の残存部隊はソ連軍に捕まらぬ事だけを願い、潰走を続けていた。

ソ連軍がどんな作戦を取るにせよ、各地から急遽集められた部隊が参戦するまでは、何の対応を取ることはできなかったのである。

◆パックフロント

ソ連軍の対戦車戦術。もともとドイツ軍が高性能のソ連戦車を撃破するため、数門の対戦車砲で１台の戦車に集中砲火をあびせた戦術が原型となっている。

ソ連軍のパックフロントは、この戦術を最高度に活用するために、５門前後の対戦車砲と対戦車銃を持った拠点を組み合せ、火力を高めると共に砲の死角をカバーするようにしていた。

このパックフロントは周囲を地雷原で固め歩兵を配置して強化された。

キロウォグラード（ステージ8）

キエフ西方の嵐に対抗するため、マンシュタインはドニエプル大湾曲部からの撤退を望んだが、ヒトラーのニコポリへの執着は強く、撤退は許されなかった。

次善の策としてマンシュタインが選んだのが、ドニエプル湾曲部の弱体化を覚悟の上で第1装甲軍を3個装甲、1個歩兵師団の兵力でドニエプル戦線から離脱させ、北へと移動させることだった。第1装甲軍の戦線は第8軍が受け継いだ。

1月中旬、第1ウクライナ方面軍先鋒がブーク川に迫ったところで、第1装甲軍は反撃にでた。この反撃によりソ連軍は大損害を受け、キエフ南西の戦区は一応の安定を見ることとなった。

東でも危険が増大していた。第2ウクライナ方面軍も第1ウクライナ方面軍の南下に合せ、クレメンチューク南方で西方へ突破を図ろうとしていた。目標はブーク川、古典的な挾撃作戦となるはずだった。

ここを守るのは、装甲3個を含む6個師団で編成された第47装甲軍団だった。ソ連軍は2個軍を投入し、予備として第5親衛機甲軍が後方に続いていた。

1月5日からの2日間、第47装甲軍団はイングル川を固守していたが、ソ連軍は新手の部隊を送り込み、イングル川の戦線は突破された。

1月7日早朝、軍団は予備の第3装甲師団を前線へと送ったが、第5親衛機甲軍は西へと進み続けた。このためキロウォグラード南北で戦っていた3個師団は戦線をたたんで、キロウォグラードへと撤収するしかなかった。

キロウォグラードに閉じこめられたのは、第3、第14両装甲、第10装甲擲弾兵、第376歩兵の4個師団。包囲の知らせを受けたヒトラーはすぐに死守命令をだした。

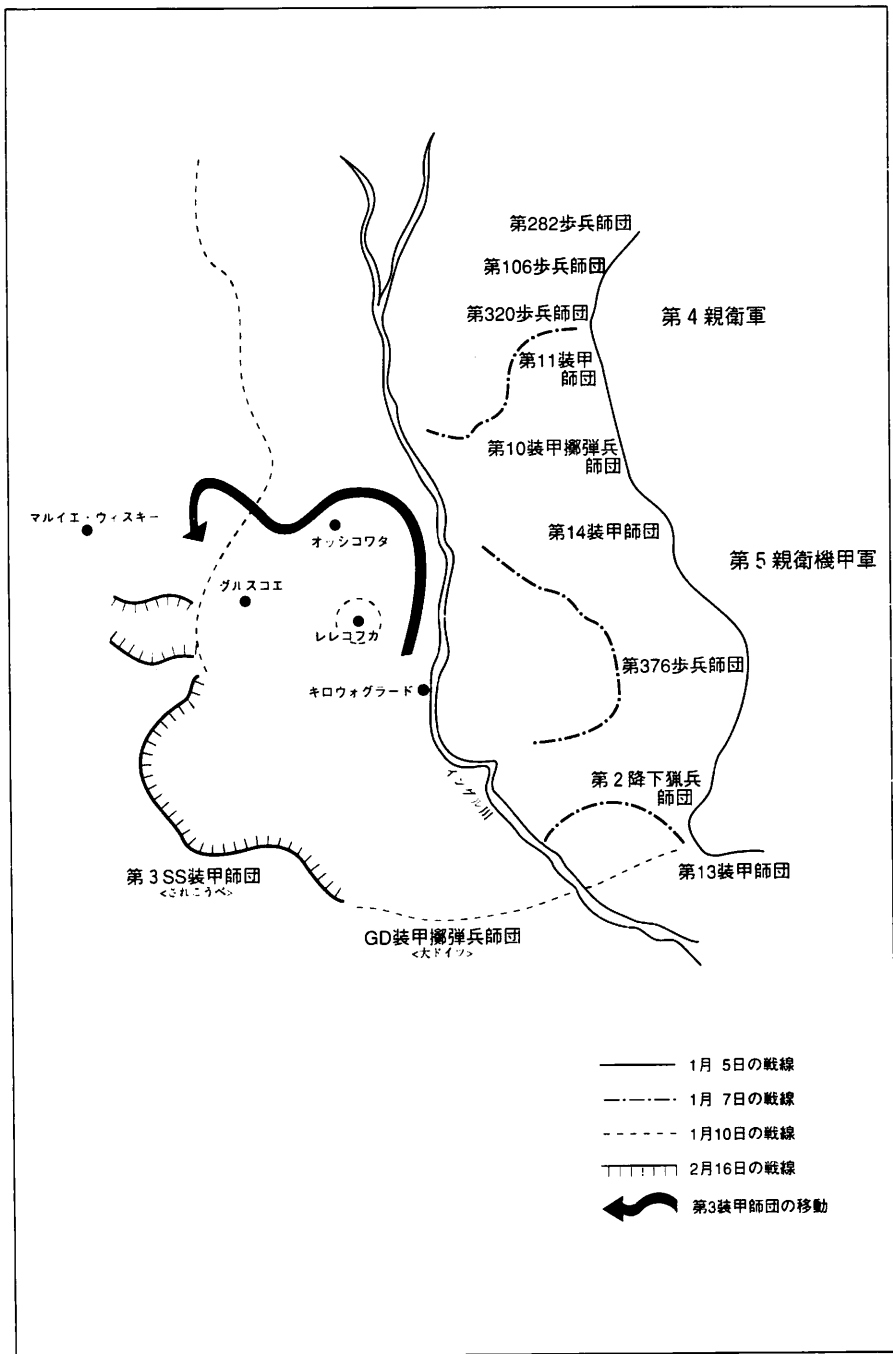
包囲された市街では、第3装甲師団長バイエルライン将軍が独断で包囲からの脱出を決意していた。バイエルラインにしてみれば、装甲師団が機動戦でなく陣地で消耗するのは、装甲師団の戦力を半減させることでしかなかった。

他の指揮官たちは脱出には参加はしなかったが、脱出を引止めもしなかった。7日の日没後には脱出のための準備は終っていた。

第3装甲師団はパンツァーカイルを組んで闇の中を北西に進んだ。ソ連軍の警戒線の砲撃で炎上した戦車があったが、パンツァーカイルはそのままソ連軍のまっただなかを突き抜ける。闇からの攻撃にソ連軍はパニックを起こし、抵抗はなかった。

1月8日、戦車1台を失っただけで第3装甲師団は包囲を抜け、キロヴォグラード西北のオッシコワタでソ連機甲部隊に襲いかかった。

それでもソ連軍の前進はとまらなかった。ブーク川までの距離の半分まではすでに踏破され、ドニエプル下流から急行中の「大ドイツ」・SS「されこうべ」師団だけが、状況を好転できるかもしれなかった。

第282歩兵師団
第106歩兵師団
第320歩兵師団
第4親衛軍
第11装甲
師団
第10装甲擲弾兵
師団
第14装甲師団
第5親衛機甲軍
第376歩兵師団
第2降下猟兵
師団
第13装甲師団
マルイエ・ウィスキー
オッシコワタ
グルスコエ
レレコフカ
キロウォグラード
第3SS装甲師団
<されこうべ>
GD装甲擲弾兵師団
<大ドイツ>
1月 5日の戦線
1月 7日の戦線
1月10日の戦線
2月16日の戦線
第3装甲師団の移動

1月9日、「大ドイツ」と「されこうべ」が突破口の南部に到着すると、第5親衛機甲軍の足が止った。

これが戦況を安定させる最後の機会だった。キロウォグラード北部レレコフカにあった3個師団に脱出命令が出され、レレコフカの部隊はグルスコエ西部で「大ドイツ」に合流することができた。3個師団はすぐに東へと向き直り、ドイツ軍は強化された戦線を形成することに成功した。同時にキロウォグラード北部から戦線後方へ進出した機甲旅団も、第3装甲師団と新着の歩兵に捕捉され、1月16日には実質的に全滅していた。

10日間の戦闘で、南方軍集団を大きく包囲する計画は挫折したが、ソ連軍は1月末、新たな攻勢に出た。

◆パンツァー・カイル

戦車の楔を意味する戦闘隊形で、楔の尖端の部分に重装甲のタイガー、パンサーが位置し、その両翼にIV号戦車を展開させる。これら戦車の後に兵員輸送車に搭乗した歩兵が続き、楔の基部は支援のための砲兵が固める配置がとられた。

パンツァー・カイルに似た隊形は戦争初期から使用されていたが、そのころの配置が突破のための楔が鋭角だったのに対して、クルスク戦以後のパンツァー・カイルは、より大規模に火力を使用するため、戦車が傘型に広がるのが特徴だった。

ソ連軍はパンツァー・カイルに対しては装甲の薄い車両を狙って隊形を混乱させる、弾幕を楔の内側の歩兵に向ける等の手段で対抗した。

⑫ コルスン包囲戦（ステージ9）

キロヴォグラードの失敗のあとソ連軍指導部が次の目標として選んだのは、カニエフの南に残るドイツ軍の弧状陣だった。12月末のキエフ攻勢の結果、第1ウクライナ方面軍が弧状陣の西に進出しているのも、包囲のための好条件となっていた。

1月25日、第47装甲軍団の北翼、弧状陣末端への第2ウクライナ方面軍の攻撃が始まった。第389歩兵師団は2日間戦線を持ちこたえたが、第2ウクライナ方面軍司令官コーネフ将軍は、第5親衛機甲軍を出撃させ、戦線に隙間をこじ開けた。そこを通ってT34の大群、そして騎兵が西に走り抜ける。

同じ頃に、第1ウクライナ方面軍も東に向って2個機甲軍を送り出していた。二つの軍の間は100km。1月28日、第5親衛機甲軍と第6機甲軍がグニロイ・ティキチュ河畔で合流し、6個師団と1個旅団が包囲された。

ヒトラーはすぐに死守命令をだしたが、それと同時にチェルカッシー包囲陣（チエルカッスィは昨年秋に失われていたがそのことは無視された）救援用の部隊の集結も命令してきた。

この命令に従って南方軍集団は9個の装甲師団を集結させることになったが、暖かくなった天候に道が泥沼化し、部隊の集結ははかどらなかった。

ドイツ軍はこれらの部隊のうち装甲5個師団を第3装甲軍団に配属し南西から、残りを第47装甲軍団として南から包囲陣に向け進撃させる予定だった。計画には救出と同時にソビエト軍を逆包囲することも含まれており、これによって戦線の安定が期待されていた。

しかし、第47装甲軍団の部隊が戦線を離脱できなかったため、攻撃は第3装甲軍団による片腕だけの攻撃へと変更された。このことは包囲部隊にも影響を与え、飛行場のあるコルスン村を中心に南に8の字に広がった戦線を西へ広げる必要を生じさせた。

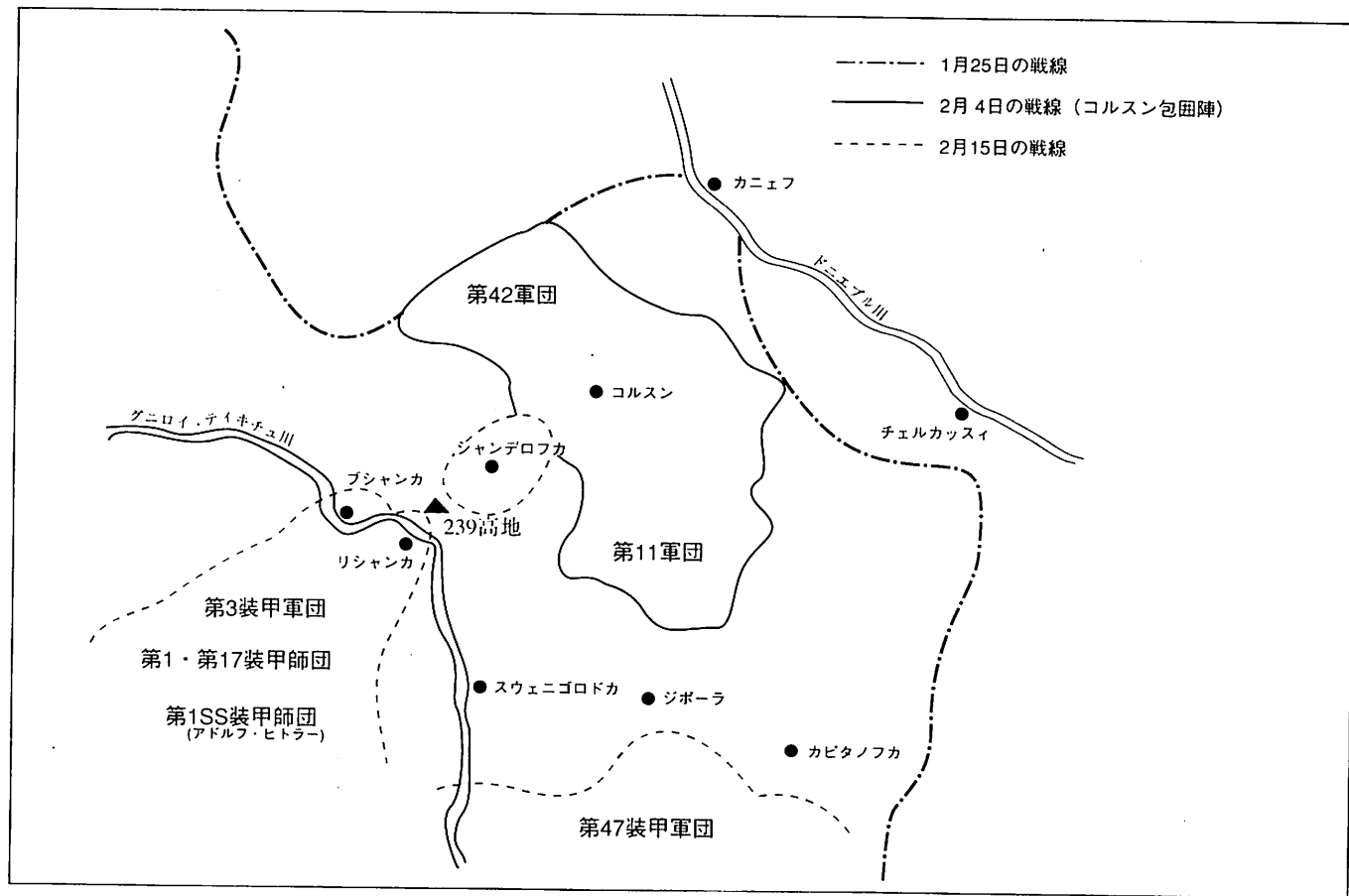
2月4日、第3装甲軍団が動き出した。部隊は半分しか集結していなかったが、ベーケ重戦車連隊のタイガーとパンサーを先頭にした攻撃は泥の中を北へ進んだ。

ソ連軍の抵抗は激しかったが、やっと到着したアドルフ・ヒトラー師団と第1装甲師団がそれも撃破してグニロイ・ティキチュ河畔にまで到達した。包囲陣までは20km足らずでしかない。だがこの20kmは兵士たちにとって無限に等しいものと感じられた。

2月11日、第1装甲師団がグニロイ・ティキチュを渡ったが、敵は斜面の上から攻撃を加え、それ以上進むことはできなかった。

その後数日間、渡河点をめぐる戦いが続いたが、14日、第1装甲師団がリシャンカ村で橋を奪ったことで救出の可能性はふくらんだ。このとき包囲陣までは10km。

2月5日、ベーケ重戦車連隊と第1装甲師団が包囲陣へ向って出発したが、3km進んで前進が止った。目の前の239高地にはソ連第5親衛機甲軍団が配置されており、新型

1月25日の戦線
2月 4日の戦線（コルスン包囲陣）
2月15日の戦線
カニェフ
ドニエプル川
第42軍団
コルスン
チェルカッスィ
グニロイ・ティキチュ川
シャンデロフカ
ブシャンカ
239高地
リシャンカ
第11軍団
第3装甲軍団
第1・第17装甲師団
第1SS装甲師団
(アドルフ・ヒトラー)
スウェニゴロドカ
ジボーラ
カピタノフカ
第47装甲軍団

のＪＳ重戦車がドイツ軍を射すくめた。16日にも第１装甲師団は攻撃を続けたが、一歩も進むことはできず、損害が増えるばかりだった。

一方、包囲陣内部の部隊も南北に伸びた戦線をたたみ、西へと向って移動と戦闘を続けていた。２月13日にコルスン飛行場を放棄したことで補給は絶えたが、包囲陣のドイツ兵は遥かな味方の砲声に耳を傾け、救出を待ちわびていた。

救出部隊にも脱出部隊にも時間は残されてはいない。２月16日、マンシュタインは包囲下の部隊に自力脱出を命じた。「合言葉は『自由』、目標はリシャンカ、23時」56000の部隊が動きだした。

脱出軍の先頭は深夜にソ連軍最前線を突破して239高地に近づいた。239高地にはＴ34がいたが引返すことはできず、ドイツ兵達は西へ進みつづけるしかなかった。

このときから悪夢が始まった。Ｔ34が砲撃し、機銃弾が地を這う中に、次から次へとドイツ兵が飛込んでくる。暗い内に脱出できた者はまだ幸運だった。

夜明けと共にソ連軍砲兵も戦闘に加わり、砲火の下にドイツ兵は部隊としての統制をなくした。兵士たちはばらばらに西へ走ったが、そこを襲撃したソ連軍騎兵によって次々と切倒された。

これらの危機をくぐり抜いた者にも最後の障害、グニロイ・ティキチユ河が待ち構えていた。救出部隊はグニロイ・ティキチユに橋頭堡を作っていたのだか、ソ連軍の攻撃で混乱した部隊の多くは橋頭堡にはたどりつけなかった。多くの者が河の中に消えた。

結局、包囲を脱出できたのは56000人中、35000人ほどだった。その脱出兵力の再編成が終るまで、南方軍集団が６個師団の減少を耐えねばならないことが、ドイツ軍の状況をさらに悪化させることになった。

コルスン包囲戦の生存者が西へ向いつつある２月18日、ソ連軍最高司令部では春の攻勢計画が発令されていた。

⑬ マンシュタインの退場

1944年3月の南方軍集団の戦力は、半年以上の戦闘のため軍を維持できる最低のレベルを下回るほどに落ち込んでいた。歩兵師団の戦力は1000人を割り、第1装甲軍は名前とは裏腹に27両の戦車を持つだけしかない。

これで1000kmに及ぶ戦線を守ることは不可能だったが、ヒトラーは退却をゆるさず、また1個の増援部隊も送られてはこなかった。

ソ連軍もこのことは良く知っていた。3月4日、第1ウクライナ方面軍の攻撃が、第1、第4装甲軍の境界附近で開始された。

これはドイツ側も予想していた事だったが、防御用の装甲部隊が移動中だったこともあって50kmの広さで戦線が破れるのを防ぐことはできず、第4装甲軍は他の部隊と分断されて西へ退却するしかなかった。

この好機を生かすため3個機甲軍が突破口から南へと向ったが、南方軍集団全域から駆けつけた装甲部隊が陣をはり、反撃を加えて機甲軍の南下は阻止された。

だが装甲部隊を抜かれ弱体化した場所が突破されるのを防ぐ手段はなかった。3月5日、第2ウクライナ方面軍がブーク川沿いの第8軍の戦線を引き裂き西へ進出した。これに対応した第1ウクライナ方面軍司令官ジューコフの行動は活発だった。先に停止した位置で攻撃を再開し、消耗したドイツ軍が後退すると、そこから機甲軍を南へと走らせた。

気温は上昇し大地は泥沼となっていたが、ジューコフは手綱をゆるめなかった。泥の中を進めるのは戦車だけだったが、数日の「泥の電撃戦」によってソ連軍はドニエストルで手をにぎることに成功した。

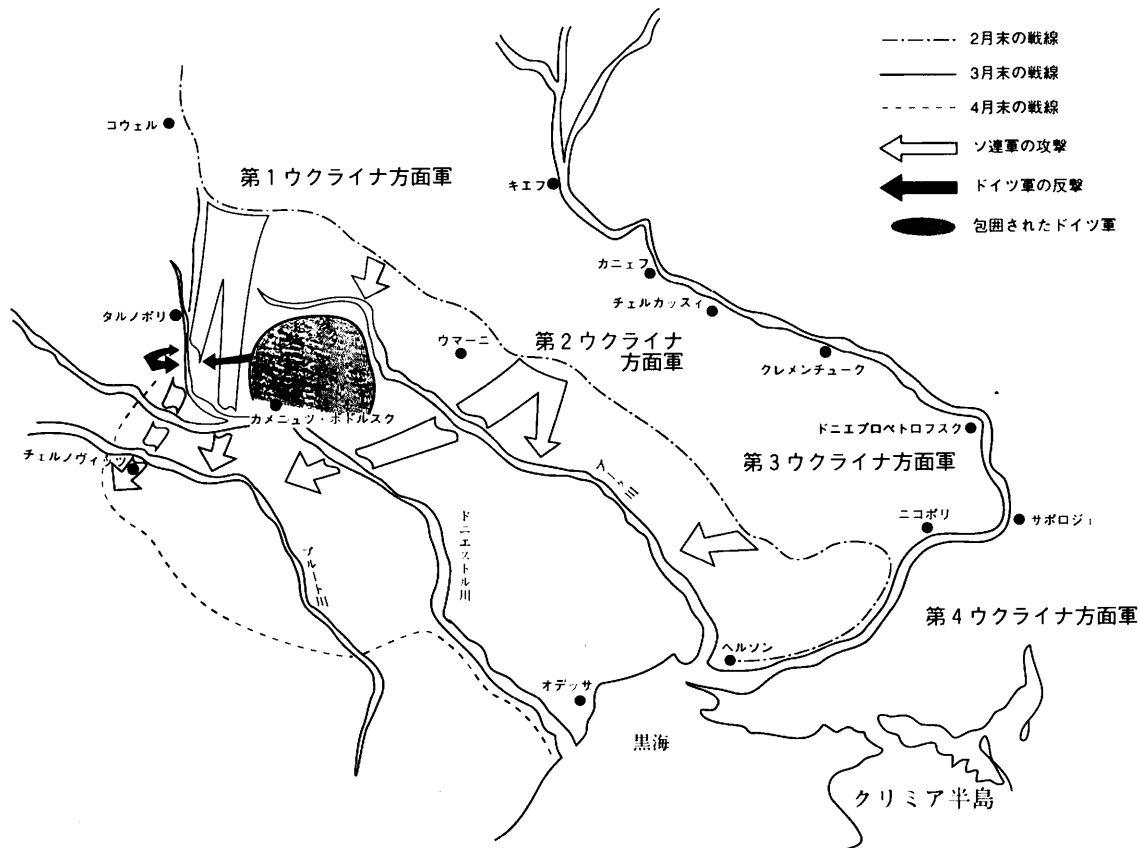
包囲された第1装甲軍は22個師団、20万人の兵力を持っていた。これを失うことは南部戦線の崩壊を意味していたが、ヒトラーの命令はいつもどうり「死守」でしかなかった。

マンシュタインは第1装甲軍を救うため、スターリングラ--ド同様、二つの敵に対して戦わねばならなかった。第1装甲軍に脱出の準備を命じると、マンシュタインはヒトラーのもとへ飛んだ。

3月25日のマンシュタインとヒトラーとの会談は決闘に等しいものとなった。マンシュタインが軍事的理由をあげれば、ヒトラーは政治的理由でそれに反論する。1日の議論の末ようやくヒトラーが譲歩し、脱出は承認され第2SS装甲軍団を中心とする救援部隊も用意された。

3月26日深夜、脱出命令が第1装甲軍に与えられると第1装甲軍は西へと動きはじめた。前には3本の河とソ連軍支配下の100kmの土地がある。

ソ連軍も脱出を予想はしていた。しかしその方向を地形障害の少ない南と予想し、部隊を南へと集中させたため、西への攻撃を防ぐことはできなかった。

2月末の戦線
3月末の戦線
4月末の戦線
ソ連軍の攻撃
ドイツ軍の反撃
包囲されたドイツ軍
コウェル
第１ウクライナ方面軍
キエフ
カニェフ
チェルカッスィ
タルノポリ
ウマーニ
第２ウクライナ方面軍
クレメンチューク
カメニェツ・ポドルスク
ドニエプロペトロフスク
チェルノヴィッツ
第３ウクライナ方面軍
ニコポリ
サポロジェ
ドニエストル川
ブルート川
第４ウクライナ方面軍
ヘルソン
オデッサ
黒海
クリミア半島

第１装甲軍は西へ進み続けた。後方を襲われて混乱したソ連の第１ウクライナ方面軍は有効な阻止手段を取ることができなかった。

４月６日、第１装甲軍はブチャチ河畔で第２ＳＳ装甲軍団と合流、脱出作戦は終った。

この結果、ソ連軍は南方軍集団の撃滅との目標を遂行はできなかったが、ウクライナを解放することには成功した。加えて３月30日に、意見の対立からマンシュタインが解任されたのも、ソ連軍の勝利にかぞえられるだろう。

ウクライナを失ったドイツ南方軍集団は北ウクライナ軍集団と改称され、安定した戦線で休息にはいった。

◆マンシュタイン

プロイセンの軍人貴族の出身。フランス戦での作戦計画、戦車の通行は不可能とされたアルデンヌ森林を突破、英仏軍を包囲する「マンシュタイン」計画を立案する。

「バルバロッサ」作戦では装甲軍団長として、レニングラード戦区で戦う。その後第11軍司令官としてクリミアで戦い、セバストポリ攻略の功により元帥に任じられる。

スターリングラードの危機のさい、ドン軍集団（後に南方軍集団）司令官に就任し後退戦闘を戦う。43年２月のハリコフ周辺での反撃は「マンシュタイン計画」と並び軍事作戦上の傑作とされる。

クルスク戦以後、ウクライナでのソ連軍の攻勢を防御、ドイツ軍を包囲全滅から救うがウクライナを失う。44年３月末に解任され、以後終戦まで復帰することはなかった。

東部戦線の崩壊（ステージ10）

ドイツ軍は南部での大敗走を5月には止めることができたが、敗走の結果プリピャチ沼沢地以南でドイツ軍はソ連領から一掃されていた。

ソ連軍が短期の休息ののち攻勢に出ることは明白だったが、その阻止のために必要な兵力は不足しており、全戦線の均等な防御は困難だった。このためソ連軍の主攻勢の位置を知り、それに適応した兵力配置が焦眉の急とされていた。

ドイツ軍首脳が攻勢地点として注目したのが北ウクライナ軍集団の戦区だった。プリピャチ沼沢地の南で西へ400km も突出した前線から北西へ450km進めばバルト海に達し、北方、中央両軍団を包囲できる。ジューコフがウクライナの鉄道修復を急ぐのもこの計画のためだとも考えられた。

バルト海作戦阻止のため、ドイツ軍は装甲8個師団を含む大戦力を北ウクライナ軍集団へと送り込んだが、それは同時に他戦区の弱体化を意味してもいた。

しかしソ連軍はバルト海作戦などは考えてはいなかった。北ウクライナ軍集団への戦闘も予定にはいってはいたが、主攻勢の場所として選ばれたのは白ロシアだった。

この計画は左右両翼から4個方面軍による攻撃を実施、中央軍集団を撃破して西へ進撃するとの単純なものだったが、自軍の補給、ドイツ軍配置等の充分な検討の上決定された計画だった。加えてソ連軍は白ロシア作戦に続く、ポーランド、バルト三国への作戦までの作戦を用意する余裕を持っていた。

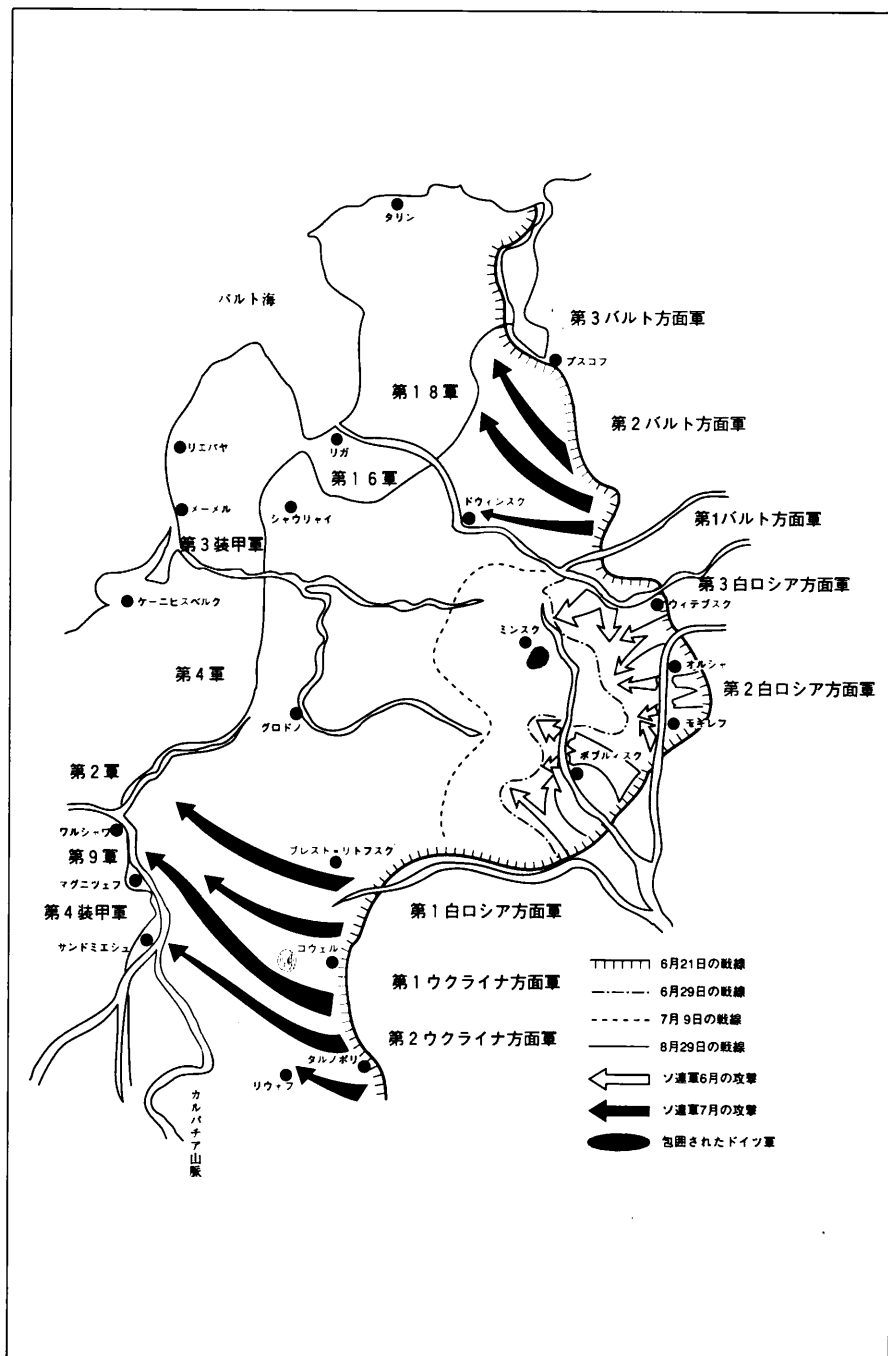
6月22日独ソ開戦3周年の日、中央軍集団北部のウィテブスクが攻撃にさらされた。翌日にはドニエプルを守る第4軍の前線に火がつき、24日までには中央軍集団東面戦線全体が大攻勢の中にあった。

200個師団に対して34個師団しか持たない中央軍集団の戦線は、攻勢開始後24時間でばらばらになっていた。

まだここで退却命令が出れば多くの兵力を救い出せたかもしれなかった。しかし中央軍集団に与えられたのは、ソ連軍の前進を阻止するため、主要都市を「確地」として保持せよとの命令だった。ヒトラーは「確地」が多くの敵を引きつけ補給を妨げて、突破力を弱めると考えていた。

だが機動戦をマスターしていたソ連軍は「確地」など無視して前進した。結局「確地」は中央軍集団から防御力の25%を取上げ、その守備に当った部隊を確実に死に追いやるだけの事でしかなかった。その末路はウィテブスクの運命が明白に示していた。22日に攻撃にさらされたウィテブスクだったが、装甲猟兵がソ連機甲軍団を撃退することに成功し、脱出路はまだ残されていた。しかし「確地」命令を受けた守備隊は市内にとどまり、27日までに全滅した。35000人の守備隊中、ドイツ側にたどりついたのはわずかだった。

ウィテブスクに終末が近づく頃、さらに危険な一撃が与えられた。第9軍の前線が第

タリン
バルト海
第3バルト方面軍
プスコフ
第18軍
第2バルト方面軍
リエパヤ
リガ
第16軍
ドウィンスク
メーメル
シャウリャイ
第1バルト方面軍
第3装甲軍
第3白ロシア方面軍
ケーニヒスベルク
ウィテブスク
ミンスク
第4軍
オルシャ
第2白ロシア方面軍
グロドノ
モギレフ
ボブルイスク
第2軍
ワルシャワ
第9軍
ブレスト＝リトフスク
マグニツェフ
第4装甲軍
第1白ロシア方面軍
サンドミエシュ
コウェル
第1ウクライナ方面軍
第2ウクライナ方面軍
タルノポリ
リウォフ
カルパチア山脈
6月21日の戦線
6月29日の戦線
7月9日の戦線
8月29日の戦線
ソ連軍6月の攻撃
ソ連軍7月の攻撃
包囲されたドイツ軍

１白ロシア方面軍によって破られ、通行不能とされた湿地の仮橋から機甲軍団が進撃した。両翼の崩壊が第４軍を孤立させた。

ようやくこの時期になってドイツ最高司令部は中央軍集団に増援を送り込んできた。だが遅すぎた。41年にはドイツ装甲師団の前進の舞台となったトロチノ・シエンノといった土地を西へゆくソ連機甲軍団は各個投入された装甲師団を追散らし、西へ動き続けた。

７月３日にはミンスクが解放された。ミンスク周辺には10万のドイツ軍が取り残され、この兵力を救いだすことはできなかった。

最初の10日間で中央軍集団は壊滅した。28個師団が戦線から消え、死傷、行方不明、捕虜の合計は40万を越えた。

７月12日、中央軍集団の崩壊でソ連軍前方300kmに残された北方軍集団が攻撃を受け、バルト海沿岸へと追い詰められ始めた。７月19日には北ウクライナ軍集団への攻撃が開始された。

ドイツ軍は全戦線で後退し、さらに多数の部隊が失われたが、７月中旬を過ぎると、ソ連軍が補給の限界を越えたこともあってその前進がにぶるようになってきた。７月29日に獲得されたウィスラ川の橋頭堡もドイツ軍の反撃によって排除された。

ソ連軍の突進力が失われたこととドイツ軍増援がさらに投入されたことで、戦線はウィスラ川で安定した。

この休息期間に、ワルシャワで幕間の悲劇が生じた。ソビエト軍の接近を知ったポーランド地下組織は８月１日、ワルシャワで武装蜂起を開始した。

しかし、ウィスラ東岸のソ連軍は何の援助もおこなわなかった。これは、蜂起したポーランド人が民族主義者だったためとも、ソ連軍の疲労のためとも言われているが、ポーランド人は孤立したまま２ヶ月を戦い、最後は降伏するしかなかった。戦闘員の死者は16000、市民の死者は20万に達し、ワルシャワ市街も完全に破壊された。

15 バルカンの破局

1944年８月ともなると、ドイツ軍には同盟国はほとんど残っていず、わずかな同盟国も機会があればドイツから離れようとしていた。

特にルーマニアは４月に国境が戦場となったことから、モスクワとの休戦交渉にはいっていた。ドイツ側もこれを知っており、ルーマニア占領計画を用意していたが、東西での破局により占領軍を編成することはできなかった。

８月20日にソ連軍がルーマニアで攻撃を開始した
３日後、ブカレストで反ドイツクーデターが発生した。この鎮圧のためルーマニア国内のドイツ軍がブカレストを攻撃したが、これはルーマニアにドイツ軍への宣戦布告の口実を与えるだけの結果に終った。

ルーマニア軍がドイツ軍に銃を向けたため、退却中のドイツ第６軍16個師団は敵中に孤立し壊滅した。ソ連軍の前進も急激なもので、９月の末までにハンガリー東部までを占領していた。

ハンガリーもルーマニア同様の休戦交渉を開始したが、今度はドイツ軍の反応も素早く、ハンガリーに傀儡政権を成立させ、ハンガリーは終戦までドイツ軍の同盟国として戦い続けることになった。

だが破局は終らなかった。ユーゴスラビアからもパルチザンに追い出されたドイツ軍はブダペスト東80kmからユーゴ北部に至る線まで後退した。10月30日、ソ連軍がブダペストを目指す攻勢を開始した。４日間の戦いでソ連軍は郊外に達したが、守備の固められた市外へ侵入することはできなかった。この戦況は１ヶ月以上続いたが、12月に再開された攻撃で、ユーゴ経由の軍の機動がドイツ軍を大きく後退させ、ブダペストは包囲された。12月下旬には他の戦線が平穏だったこともあって、ヒトラーはブダペスト救援のために、ＳＳ装甲２個師団を含む装甲戦力をハンガリーに送りこんだ。

ブダペスト救出作戦は1945年１月を通じて実施され、市外に10kmまで迫ったが失敗し、ブダペストも２月には陥落した。

大敗北の続く中、ヒトラーはドイツ軍が進撃できたことに飛びついた。ハンガリーこそ勝利の鍵と信じたヒトラーは、ベルリンまで60kmの距離にいるソ連軍を無視し、最後の装甲兵力ＳＳ装甲軍をもハンガリーへと送り込んだ。

ＳＳ装甲軍は戦争の残りの期間、ハンガリーとオーストリアで戦い続けるが、戦局に何の影響も与えることはなかった。

16 最終戦

1944年の秋、東西両面の連合軍は補給の問題からドイツ国境で停止し、戦線は一時的に安定していた。

休息期間を利用してヒトラーは帝国の人的資源を総動員していた。召集された兵士の多くは老人か少年であり、訓練不足で武装もない者も多かったが、100万の兵力の増加はこの夏だけで120万を失ったドイツ軍にとってはすぐにでも必要な戦力だった。

だがこの兵力の使用をめぐってヒトラーと参謀総長のグデーリアンが対立した。グデーリアンは東部戦線を強化することを望んでいたが、ヒトラーは西部戦線で攻撃に出て、戦争を勝利で終らせることを決意していた。

ヒトラーの意志は強く、秋を通じて全ての装備と兵員が西部戦線へと振り向けられた。グデーリアンはまたラトビアに孤立した北方軍集団の撤退も要請していたが、これも拒否された。「東部戦線は現有兵力で持久せよ。」これがヒトラーの命令だった。

グデーリアンはそれでも東部戦線強化のために働き続けたが、歩兵で11対1、砲で20対1、戦車で7対1といった劣勢をくつがえす方法はなかった。

1月12日、20000門の砲の一斉射撃がウィスラ西岸へと加えられた。ソ連軍攻勢の一番手、第1ウクライナ方面軍の攻撃だった。この攻撃を受けた第48装甲軍団は3個歩兵師団と自走砲130門を持っていたが分断、各個撃破されて戦線は崩壊した。ソ連軍の先鋒は1日のうちに25kmを進み、反撃用のタイガーII大隊と装甲師団をも全滅させた。

14日には第1白ロシア方面軍もワルシャワ前面で攻勢を開始し、ドイツ軍はここでも敗北した。

40万の兵員、4000門の砲、1200両の戦車しかないA軍集団が200万の兵員、46000門の砲、6400両の戦車を持つ2個方面軍の攻勢をくいとめられるわけはなかった。

1月16日にはポーランドの戦線は存在しなくなっていた。ウィスラ川に空いた300kmの穴からソ連軍は150kmの深さに侵入し、17日にはワルシャワが陥落した。

ヒトラーもこの事態に、西部から東部へと重点を移すことを決意したが、装甲予備SS装甲軍はハンガリーへと送られ、ベルリン前面に回されたのは西部で弱体化した部隊だけだった。

1月24日には、第1ウクライナ方面軍がブレスラウ附近でオーデル川に達し西岸に橋頭堡を築いていたが、A軍集団には反撃する戦力は残されていなかった。

この日、中央軍集団とA軍集団との間の空隙を埋めるため、ヴァイクセル軍集団を編成することが決定された。司令官に任命されたのはSS長官ハインリッヒ・ヒムラー。ベルリン前面を守るためにヒトラーが選んだのは、何の軍事知識もない素人だった。

ヴァイクセル軍集団の編成された1月25日、東部戦線のドイツ軍は大規模な名称変更を実施し、北方、中央、A軍集団がそれぞれクールラント、北方、中央軍集団と改称された。

バルト海
ケーニヒスベルク
第３白ロシア方面軍
コルベルグ
ダンチヒ
ヴィスラ川
第２白ロシア方面軍
ビャリストク
シュチェーチン
オーデル川
第１白ロシア方面軍
キュストリン
ベルリン
ポズナニ
フランクフルト
ワルシャワー
ナイセ川
バルタ川
第１ウクライナ方面軍
ブレスラウ
サンドミエシュ
1月11日の戦線
2日 2日の戦線
3月31日の戦線
ソ連軍の攻撃
ドイツ軍の反撃

しかし、ヒムラーの登用も部隊名の変更もソ連軍の足を止めることはなかった。

1月末、キュストリンの両側で第1白ロシア方面軍はオーデル川を渡河した。雪解けがソ連軍をを停止させたが、ベルリンまでの距離はあと50kmしか残っていなかった。

ソ連軍の攻勢も戦力の消耗から2月初旬には休止していたが、第1白ロシア方面軍はオーデル川でベルリン攻撃の準備を整えていた。グデーリアンは第1白ロシア方面軍が、他方面軍よりも西へ60kmほど突出していることに注目し、突出部を南北から挟撃する作戦を立案した。グデーリアンは南からの攻撃のためSS装甲軍の使用を望んだが拒否され、北からのみ攻撃が実施された。「夏至」作戦と名づけられた攻勢は、装甲7個師団を含む兵力で2月15日に開始されたが、ドイツ軍は2日で10kmしか進むことができなかった。3日目には作戦中止が決定した。だが、「夏至」はベルリン攻撃を遅らせることには成功した。「夏至」を知ったスターリンは、側面にドイツ軍を残したままのベルリン攻撃を中止させ、オーデル以東のドイツ軍の掃討を急ぐように命じた。2月から3月にかけてオーデル川の戦線は平穏だった。

◆SS

SSはナチ親衛隊（Schutz Staffel）の略称。SSの中の軍事組織、武装SSは軍とは別の指揮系統に属していたが、便宜的に陸軍の指揮下で戦闘に参加した。

初期のSS部隊の強みは部隊の機械化率の高さで、SS部隊は装甲師団と共に戦うことが多かった。

1942年以後、武装SSは独自の装甲部隊を持つようになったが、同時期に武装SSの規模が拡大され、ロシア人部隊や囚人部隊までが編成される等、武装SSの質自体は低下することになった。

それでもSS装甲師団は装備、人員が陸軍のものより多かったため、戦争後半各所で戦線の消防隊として使用され続けた。

17 キュストリン（ステージ11）

オーデル東岸の掃討作戦の間も、第１白ロシア方面軍がベルリン攻勢の準備をやめた訳ではなかつた。物資と兵員は続々と橋頭堡へと送りこまれていた。だがこの過程で各橋頭堡が大攻勢のためには手狭なことも明らかになった。ベルリン攻勢の前に出撃地点確保のための戦闘が必要だった。

攻撃の場所としてはキュストリン地区が選ばれた。キュストリン要塞の南北にある橋頭堡が合同できれば作戦空間は充分に広くなる。それに補給を考えればキュスリトン要塞の攻略も急ぐ必要があった。

３月22日、キュストリン北で第５打撃軍、南から第８親衛軍が出撃した。短時間でキュストリンの包囲は完成した。ソ連軍はベルリン前方の制高点ゼーロウ高地を奪取するため西へ機甲軍団を前進させた。

ゼーロウ後方にはドイツ軍の予備、ミュンヘベルク装甲師団が配置されていた。最近、射撃訓練大隊やベルリン警備連隊を寄せ集めて編成された師団の戦力は強力な戦隊程度でしかなかったが、戦車大隊の持つパンサー27両、タイガー各型28両は戦車連隊の平均戦力が20両程度のいま貴重な装甲戦力だった。

ソ連軍を撃破するためミュンヘベルクが配置されたのは、ベルリン～キュストリン道路のゴルソウ・ツイツエバントの十字路だった。右翼ツイツエバントに第１中隊のパンサーが、左翼ゴルソウには第２中隊のタイガーが配置される。第３中隊は後方で予備として待機した。

Ｔ34、120両を主力とする機甲軍団が道路上にあらわれたとき、パンサー中隊が火蓋をきった。Ｔ34が次々と炎上し、右往左往するＴ34を今度はタイガーの砲火が襲う。数分の内に道路は破壊されたＴ34でいっぱいになった。

しかしソ連軍は予備を集結させると北から前進を再開した。煙幕があつく張られ、その陰をＴ34が迂回する。ミュンヘベルク師団も戦車大隊を集結させると、煙幕から飛び出すＴ34を撃破した。この日突撃の試みは全てミュンヘベルク師団によって阻止され、ソ連軍はゼーロウ東へと後退するしかなかった。

キュストリンでの突破を防いだヴァイクセル軍集団は３月25日、ヒトラーの命令によりキュストリン要塞の救出を実行することとなった。投入されたのは装甲、装甲擲弾兵４個師団。そのなかにはミュンヘベルク師団も含まれていた。

キュストリンを救出するだけなら、攻撃は成功するかもしれなかった。だがヒトラーはキュストリン橋頭堡の排除を望み、部隊はキュストリン南方フランクルト要塞のオーデル東岸へとはいった。

攻撃は３月27日に開始されたが、狭い要塞からの出撃はソ連軍の砲撃の前に挫折した。

キュストリン要塞は３月29日に陥落した。同じ日参謀長グデーリアンが解任され、ドイツ軍最後の頭脳が戦場を去った。

◆グデーリアン

ドイツ装甲部隊の生みの親。装甲師団の編成、装備、戦術等全ての面で大きな影響を残した。

ポーランド戦及びフランス戦で装甲軍団長。特にフランス戦では、アルデンヌ森林を突破したグデーリアン軍団が英仏軍を包囲したことが、ドイツの勝利を決定的にした。

「バルバロッサ」作戦では第2装甲集団司令官をつとめ、モスクワへ迫ったが、12月、部隊を後退させたことから解任される。

43年2月装甲兵監として装甲部隊の装備と訓練を統括し、消耗した装甲師団の再建にあたる。

44年7月、ヒトラー暗殺未遂事件のあと参謀総長となるが、ここでもヒトラーと対立し、45年3月、終戦直前に解任される。

グデーリアンの戦車、機動戦に関する理論は古典とされ、現在なお世界中の陸軍で研究されている。

◆戦隊

ドイツ語"Kampfgruppe"(カンプグルッペ)、正式な編成ではなく戦闘のさい臨時に編成された部隊のことを言う。

装甲師団の場合、戦車大隊と機械化歩兵中隊各1個、それに支援部隊と云った編成が取られることが多かった。

この編成は戦隊だけで独立しての戦闘を可能とするものであり、現在の機甲師団でも類似の編成が戦闘団として取られている。

ただドイツ装甲師団の場合、41年の再編成以後装甲師団の歩兵数が2倍になったことや、戦車とともに行動できる兵員輸送車の数が少なかったことから、戦車を中心として戦隊ばかりでなく、歩兵中心の戦隊等も含む4~5個の戦隊に分割されることが多かった。

また戦争後半になると上記のものの他、戦力の減少した師団から戦力を抽出した戦隊や、コック、事務員までもかき集めた戦隊も編成された。

末期のドイツ軍は師団の戦力が低下したため、これら臨時編成の戦隊が前線をささえ、また反撃に使用されることになった。

18 ベルリン（ステージ12）

4月1日、クレムリンでベルリン攻撃のための会議が開かれた。参加者は第1白ロシア方面軍司令官ジューコフと第1ウクライナ方面軍司令官コーネフ。スターリンがベルリン征服の栄誉を与えることにしたのはこの二人の元帥だった。攻撃開始は4月16日、ベルリン攻撃までの二週間に突撃の準備が進められた。4000門の砲とその弾薬、6000両の戦車が集結した。対するヴァイクセル軍集団の戦車は、180台でしかない。

4月16日早朝、キュストリン前方は一斉砲撃の轟音と閃光に包まれた。この日、ソ連砲兵がドイツ軍陣地に降らせた砲弾は123万発、10万tものぼった。

砲撃がやむと、掘返された戦場を140基のサーチライトが照しだし、歩兵の前進路を示していた。

しかし、これらの大道具が戦闘に与えた影響はすくなかった。ドイツ軍が陣地から後退していたため砲撃は無人の土地を耕しただけに終り、サーチライトはドイツ兵よりもソ連兵の目をくらませて道に迷わせた。

ドイツ軍は持てる火器全てを使って前進するソ連軍をたたきゼーロウ高地への進出を阻止した。

前進の遅さにしびれを切らせたジューコフは2個機甲軍に攻撃を命じたがこれは交通渋滞を起こして攻撃を混乱させただけに終った。

同じ頃南方では第1ウクライナ方面軍がナイセ川の渡河に簡単に成功し、2個機甲軍を作戦に参加させていた。2個軍はベルリンを南から包囲することになる。

コーネフの成功にいらだったのはヒトラーよりもジューコフだったかもしれない。ジューコフは翌日中のゼーロウ突破を命令した。

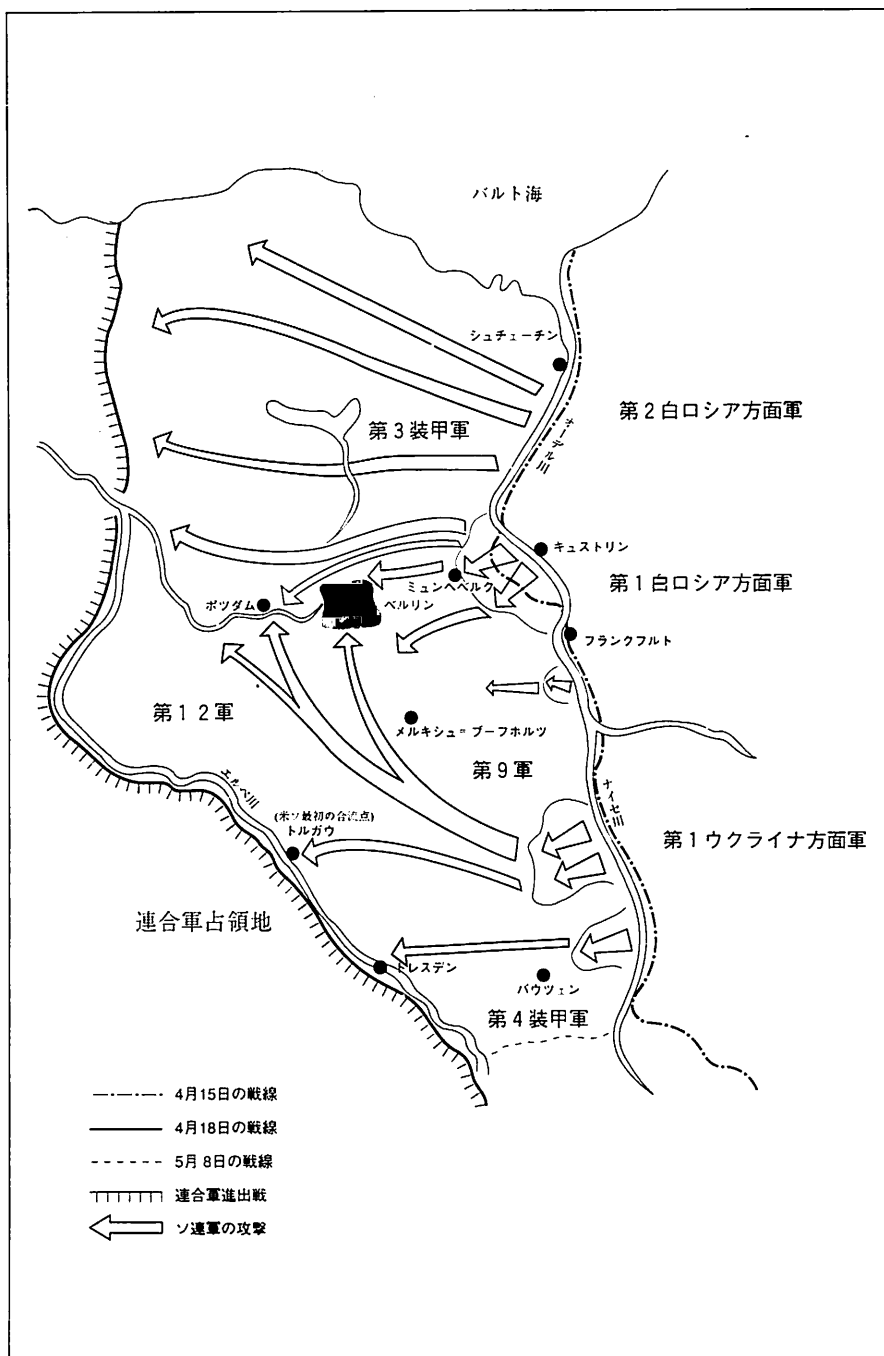
ゼーロウを守っていたのは第9降下猟兵師団だった。パイロットや整備員だった兵士は装備も訓練も足りなかったが、88㎜砲を含む20門以上の高射砲が兵士たちの支えとなっていた。

4月17日第8親衛軍はゼーロウへT34と歩兵の大群を再度差し向けた。第9降下猟兵師団は昼の間抵抗し続けたが、戦闘で高射砲が全て破壊されるとパニックが発生した。夜までにゼーロウからドイツ兵の姿はなくなり、無人の高地の下をT34が西へ向けて動き出した。

ゼーロウの陥落はベルリン最後の防衛線の消滅を意味していた。ドイツ軍にできることは機甲部隊の前進を遅らせるために手持ちの全てをつぎこむことだけだった。

ミュンヘベルク師団を含む、少数の装甲部隊がソ連軍の大波の中に投込まれ、はじきとばされた。

4月20日、ドイツ軍の抵抗は打砕かれて、ソ連軍は東と南から大きく西へ進み、オーデル河畔に第9軍は孤立した。午後、ソ連軍の長距離砲がベルリン市街へ最初の砲弾を

バルト海
シュチェーチン
第2白ロシア方面軍
第3装甲軍
オーデル川
キュストリン
第1白ロシア方面軍
ミュンヘベルク
ポツダム
ベルリン
フランクフルト
第12軍
メルキシュ=ブーフホルツ
第9軍
ナイセ川
エルベ川
(米ソ最初の合流点)
トルガウ
第1ウクライナ方面軍
連合軍占領地
ドレスデン
バウツェン
第4装甲軍
4月15日の戦線
4月18日の戦線
5月 8日の戦線
連合軍進出戦
ソ連軍の攻撃

打ち込んだ。

4月24日には第8親衛軍と北上してきた第3親衛機甲軍が手をつなぎ、ベルリンは包囲された。

ベルリンに閉じ込められた部隊はもはや軍隊とはいえないようなものだった。10人に1人が武器を持つだけの国民突撃隊、「ミュンヘベルク」師団を筆頭とする陸軍の敗残兵。ヒトラーの司令部を守るのはＳＳのフランス人義勇兵だった。

これを攻撃するのは第1ウクライナ、第1白ロシア方面軍の5個軍、勝敗は最初から見えていた。

4月26日、ソ連軍はベルリン市街へと突入した。建物全てから射撃が加えられ、ソ連軍の損害も多かったが、ソ連軍は市街の奥へと進み続けた。

4月27日には、ベルリンのドイツ軍は幅数kmのベルリン中心部へと押込められていた。ティアガルテンでは「ミュンヘベルク」師団の5両になった戦車が第503ＳＳ重戦車大隊のタイガーII共々戦い続けていた。

4月30日、ヒトラーはベルリンの地下壕で自殺した。5月2日、ベルリンのドイツ軍は武器をおいた。

だがソ連軍への降伏を望まぬ兵士たちは5月3日、ベルリンから西へと脱出を試みた。先頭をゆくのは「ミュンヘベルク」師団最後の戦車、5000人がそれに続く。

ベルリン市内ハーフエル川の橋をめぐっての戦いで大殺戮が生じたが、ごく小数のものだけが西へ逃げることに成功した。

4月の末、東部戦線では全ての流れは西へと動いていた。そのなかにはオーデル川に孤立した第9軍も含まれていた。

第9軍がオーデル川の戦線をたたむことができたのは、4月28日のことだった。すでにソ連軍は50km以上西にまでいる。だが第9軍司令官ブッセ将軍にここで手をあげる気はなかった。5万の軍隊とそれに倍する民間人がソ連軍と戦いながら西へ進む。

最前列には第502ＳＳ重戦車大隊と第9軍に残った装甲部隊「クルマルク」師団があった。

もちろん、ヘッツアー、パンサー各4個中隊、タイガーII3中隊の戦力は10両足らずにまで落込んでいたが、残り少ない砲弾を気にしつつ、「クルマルク」は先頭を走り続けた。

5月1日、ベーリッツの東で第9軍はソ連軍の猛砲撃を受けていた。最後の2台のタイガーIIと疲れきった歩兵がソ連軍に向って突進する。前方に信号弾があがった。色は白。第9軍救出のため戦い続けていた第12軍の前線だった。

オーデル河畔に陣取った第9軍20万の内、3万だけが、第12軍とともに米軍に降伏することができた。

5月7日、ドイツは連合国に降伏した。ソ連の死者は2000万人、ドイツは600万人。これが4年間の戦争の血の決算だった。

デザイナーズノート

1990年、ついに東西ドイツは統合されることとなりました。これほどの急転換は誰にも予想できなかったでしょうし、私たち「プリッツクリーク」のスタッフにとっても、企画をスタートさせた頃を思い出せば、まさに隔世としか言いようがありません。

折りしも、日本のパソコンゲーム業界においては、近年盛り上がりを見せつつあるシミュレーションゲームの中で、特に欧州２次大戦ものが集中した年でもあります。偶然と言ってしまえばそれまでですが、システムソフトも遅ればせながら発売に漕ぎ付けたことで、胸をなで降ろしているというのが、偽らざる心境です。と同時に、長年の悲願がようやく実現したことの感慨もひとしおです。

思い起せば「大戦略シリーズ」がスタートして今年の11月で満５年となります。皮肉なことにその第１弾「現代大戦略」のデザイナーズノートを読み返してみると、すでにそのときの指針として、意識的にヒストリカル性をなくすことが、すなわちシミュレーションゲームを普及させることの大前提であったことが、改めて確認できます。果たしてその結果、ユーザーの皆様の暖かいご支持を賜わり、シリーズを重ねる毎に輪が広がりつつありますが、その反面このままでいいのだろうかという不安も抱きつつありました。

「大戦略シリーズ」のスタッフには、根っからのボードゲームマニアも多いわけですが、シミュレーションゲームのアイテムとして、やはりヒストリカルシミュレーション、それも２次大戦を欠かすことはできないというのがスタッフの共通の認識でした。と言うのも、戦術級シミュレーションとしては、２次大戦が格好の舞台であるという持論があるからでもあります。しかしながら一方で、一歩間違うとボードゲームのようにマニアだけの世界に落込む危険性があり、ジレンマを抱えつつ、ここまで来てしまったわけです。

そういう紆余曲折を経てシステムソフト初のヒストリカルシミュレーション「プリッツクリーク」が完成したわけですが、正直なところ今回の作品は試作品に近い性格のものです。我々がもっとも心配したのが、２次大戦、しかもヨーロッパ東部戦線ということで、特に兵器や時代背景の知識が、大半のユーザーには備っていないということでした。すなわちゲームに対する思い入れが、どうしても薄れてしまうことを覚悟しなければならなかったわけです。

しかしながらそれを恐れていたのでは、結局「大戦略」の兵器が置き換わっただけのゲームになってしまいます。ですから、ヒストリカルシミュレーションの面白さを味わっていただくために、まずはユーザーの皆さんに最低限の予備知識を持っていただきたいというのが率直な気持ちです。

そのため特に兵器のデータについては、ゲーム性を損わない範囲で、個々の兵器の特徴をできる限り表現できるように心掛けました。また、兵器や実在地形の雰囲気を大切にするために、弊社のゲームとしては初めてアナログ専用のグラフィックスに踏み切りました。兵器と時代背景については、後に参考文献をまとめましたので、よろしかったらご参照ください。

さて、何と言ってもヒストリカルシミュレーションの醍醐味は、歴史的な分岐点に立ち、自分がその場の指揮官であった場合にどう判断したかということと、その結果どうなるのかを疑似体験できるところでしょう。史実では敗戦に終った作戦を勝利に導くというのがその最たるものですが、それよりも同じ負けるにしても、よりベターな負け方をするというほうが、ヒストリカルシミュレーションの極めつけでもあります。“敗戦の美学”と形容するマニアもいるくらいです。つまり必然的な歴史の潮流には逆らえないわけで、その不利な状況の中で、いかに少しでも有利に導けるかどうかが、すなわち面白さなわけです。そういう意味で、完全勝利が勝利条件であった「大戦略シリーズ」とは、全く趣が違います。

また今回の「ブリッツクリーク」では、プレイヤーである皆さんは、ドイツ軍を担当するわけですが、優秀な兵器群で構成された無敵のドイツ機甲師団、という一般的なイメージと異なり、これほどまで悲惨な状況であったとは知らなかった方も多いのではないでしょうか。逆にナチスドイツというとどうしてもヒトラーの独裁というイメージが先行しがちですが、そのドイツ軍にしても、また敵であるソビエト軍にしても、そこには有名、無名を問わず、指揮官・兵士達一人一人の苦悩と英知があったわけです。

もっともあくまでも「ブリッツクリーク」はゲームですから、基本的には単純な面白さを優先しています。しかしながらこのゲームを通じて少しでも歴史への興味や憧憬を深める一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、私たちスタッフ一同、ぜひともこのヒストリカルシミュレーションというジャンルを確立するべく、今後も頑張っていきたいと思います。ぜこご意見・ご感想などをお寄せください。

1990年12月
「ブリッツクリーク」スタッフ一同

参考文献

以下の書籍を参考文献としてお勧めしますが、残念なことに現在これらの書籍は入手が難しくなってきています。書店に注文していただいても品切れの可能性がありますので、あらかじめご了承ください。また高価な書籍は、公共の図書館等をご利用されるのも１つの方法です。

書籍名	著者	訳者	出版社	定価(税込)
バルバロッサ作戦	パウル・カレル	松谷健二	フジ出版社	3,605円
焦土作戦	パウル・カレル	松谷健二	フジ出版社	3,605円
電撃戦	グデーリアン	本郷健	フジ出版社	5,665円
失われた勝利	マインシュタイン	本郷健	フジ出版社	6,695円
最終戦	W・パウル	松谷健二	フジ出版社	2,060円
ヒトラーの戦争①～③	D・アーヴィング	赤羽龍夫	早川文庫	620円
パンツァー・フォー	アルマン	富岡吉勝訳	大日本絵画	2,884円
第２次世界大戦	リデル・ハート	上村達雄訳	フジ出版社	8,500円

〔第二次世界大戦文庫〕

書籍名	著者	訳者	出版社	定価(税込)
ドイツ機甲師団	ケネス・マクセイ	加登川幸太郎	サンケイ出版	464円
無敵！T34戦車	ダグラス・オージル	加登川幸太郎	サンケイ出版	464円
ナチ武装親衛隊	ジョン・キーガン	芳地昌三	サンケイ出版	464円

雑誌

「戦車マガジン（戦車マガジン社）」「パンツァー（サンデーアート社）」などの雑誌、およびそれらの増刊号などにも、参考になるものがあります。

《ヒストリカルノート　スタッフ》

著者
堀内則明

編集
池尻賢一
知識計画

協力
石川淳一
中田浩之

1990年12月　初版１刷発行